

報恩寺遺跡発掘調査報告書

－市道整備事業大矢循環線道路改良工事に係る発掘調査－

2015

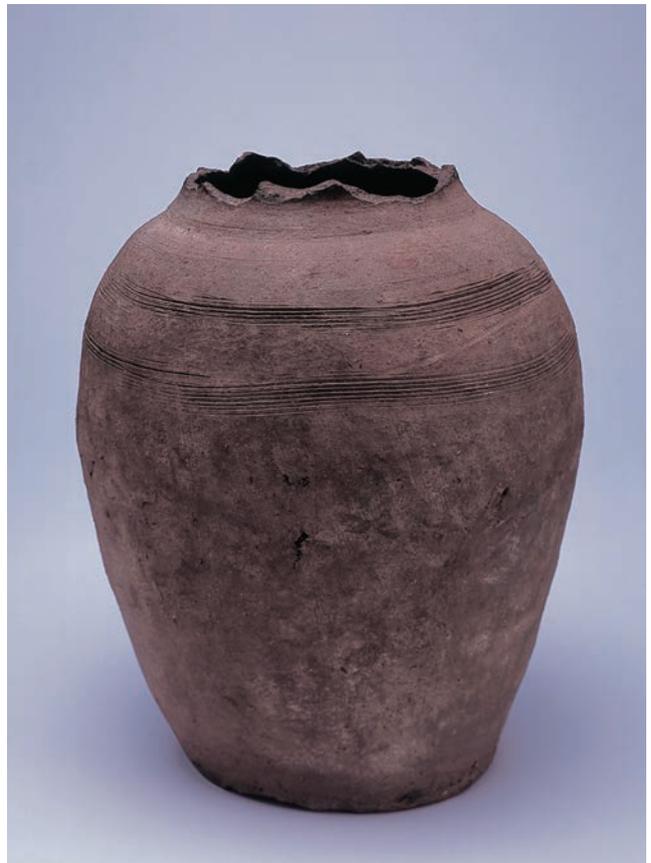
東広島市教育委員会



a. 報恩寺遺跡空中写真遠景（南から）



b. SF1全景（北から）



c. 古墓群2 出土備前焼壺

は し が き

東広島市は広島県のほぼ中央に位置し、平成17年2月の周辺5町との合併により、人口は県内4番目、面積が県内5番目の規模を持つ都市となり、「未来にはばたく国際学術研究都市」を将来像に掲げたまちづくりに取り組んでおります。

今回、発掘調査が実施された入野地区は、市中心部より東に位置し、山陽自動車道河内インターチェンジが所在することから陸上交通の拠点となっており、隣接する広島空港へのアクセス地点として本市において重要な役割を担っています。

弥生時代にさかのぼる遺跡も確認され、古い歴史をもつ入野地区ですが、中世には安芸国の国人領主である平賀氏、竹原小早川氏、沼田小早川氏らがその領有をめぐって争奪を繰り返した地でもあり、多くの山城が点在しているという特徴がみられます。

本報告書は、その騒乱の時代に成立した伝承のある報恩寺の近直において計画された市道整備事業に伴って実施された発掘調査の成果を収録したものです。本書が当地域の歴史を解明する一助となり、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくための資料として広く活用されることを願っております。

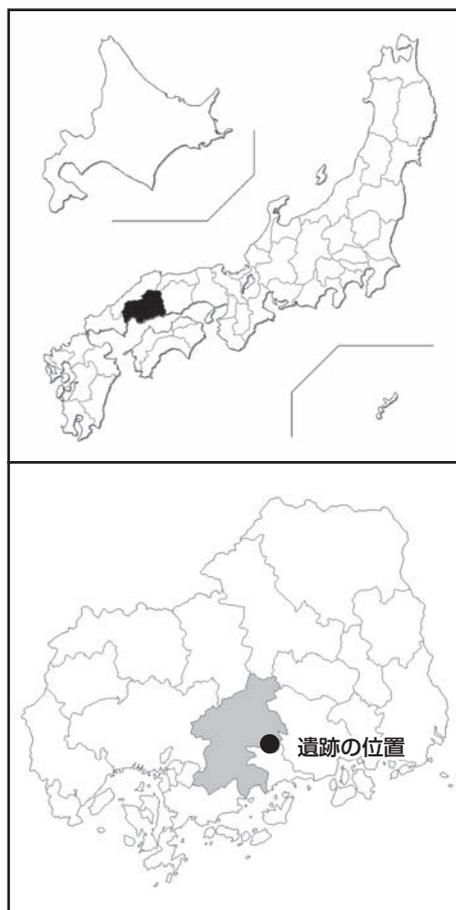
なお、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各機関、研究者の皆様及び地元の方々に対し、深く感謝いたします。

平成27年3月

東広島市教育委員会
教育長 下川 聖二

例 言

- 1 本書は、東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が発掘調査を実施した市道整備事業大矢循環線道路改良工事に係る^{ほう}報恩寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は東広島市から委託を受けて、平成25（2013）年度に市教委が実施した。整理・報告書作成作業も東広島市から委託を受けて、平成26（2014）年度に市教委が実施した。
- 3 発掘調査は、市教委の主査中山 学、埋蔵文化財調査員杉原弥生が担当し、市教委職員が協力した。
- 4 整理・報告書作成作業は中山と埋蔵文化財調査員吉田由弥が担当し、市教委職員が協力した。
- 5 遺構の実測は中山・杉原、写真撮影は中山が行った。
- 6 遺物の実測は吉田、写真撮影は中山が行った。
- 7 基準杭の打設は、有限会社広伸測量に委託した。
- 8 空中写真の撮影は、株式会社イビソク広島営業所に委託した。
- 9 本書の内容は調査関係者で検討し、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（1）遺構、Ⅴを中山が、Ⅳ（2）遺物を吉田が執筆し、中山が編集を行った。Ⅴまとめ6．結語については市教委文化課主査 吉野健志が協力した。
- 10 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
- 11 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000 地形図『白市』を使用した。
第2図は東広島市発行の1:2,500 東広島市地形図（P-14）を使用した。
- 12 本書で使用した方位は、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）である。
- 13 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。
- 14 SK：土坑、SD：溝、SV：石列、SF：道、SB：段状遺構（住居跡）、SM：塚
- 15 調査で得られた資料については、報告番号37以外は東広島市教育委員会が保管している。



広島県東広島市と遺跡の位置

報恩寺遺跡発掘調査報告書

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	調査の概要	7
IV	遺構と遺物	12
	(1) 遺構	12
	(2) 遺物	26
V	まとめ	34
	報告書抄録・奥付	

挿 図 目 次

第1図	報恩寺遺跡と周辺遺跡分布図 (1:25,000)	6
第2図	報恩寺遺跡調査区と周辺地形図 (1:2,500)	8
第3図	A区遺構配置図 (1:150)	折込
第4図	B区遺構配置図 (1:150)	11
第5図	A区SK1~3実測図 (1:20)	13
第6図	A区SK4~7実測図 (1:20)	14
第7図	A区SK8実測図 (1:20)	15
第8図	A区SD1~3実測図 (平面図1:60、断面図1:20)	17
第9図	A区SD5・7・8実測図 (平面図1:60、断面図1:20)	18
第10図	A区SD6実測図 (平面図1:60、断面図1:20)	19
第11図	A区SV1実測図 (1:40)	19
第12図	A区SF1実測図 (1:60)	20
第13図	A区T1・2実測図 (平面図1:100、断面図1:40)	22
第14図	B区SB1実測図 (1:60)	23
第15図	B区SB2実測図 (1:60)	24
第16図	B区SM1実測図 (1:60)	25
第17図	出土遺物実測図1 (1:3)	27
第18図	出土遺物実測図2 (1:3)	28
第19図	出土遺物実測図3 (1:3)	29
第20図	出土遺物実測図4 (26~31は1:3、32・33が1:4)	30
第21図	出土遺物実測図5 (1:2)	31
第22図	出土遺物実測図6 (1:3)	32
第23図	古墓群2位置図 (1:5,000)	35

巻頭図版目次

巻頭図版 a. 報恩寺遺跡空中写真遠景 (南から)

巻頭図版 b. SF1全景 (北から)

巻頭図版 c. 古墓群 2 出土備前焼壺

表 目 次

表 1 遺物観察表..... 33

図 版 目 次

扉 報恩寺遺跡空中写真近景 (南東から)

図版 1 a. 調査前遠景 (南から)

b. 調査前近景 (南東から)

図版 2 a. A区SK1土層断面 (南から)

b. A区SK1完掘状況 (北から)

c. A区SK2土層断面 (東から)

d. A区SK2遺物出土状況 (北東から)

e. A区SK3土層断面 (南から)

f. A区SK3完掘状況 (北東から)

図版 3 a. A区SK4土層断面 (南から)

b. A区SK5土層断面 (南から)

c. A区SK6土層断面 (南から)

d. A区SK4・5・6完掘状況 (北から)

e. A区SK7土層断面 (南から)

f. A区SK7完掘状況 (北から)

図版 4 a. A区SK8土層断面 (東から)

b. A区SK8完掘状況 (東から)

c. A区SD1・2完掘状況 (南西から)

d. A区SD1土層断面 (北東から)

e. A区SD3完掘状況 (北東から)

図版 5 a. A区SD4完掘状況 (北から)

b. A区SD5土層断面 (東から)

c. A区SD6土層断面 (東から)

d. A区SD5・7・8完掘状況 (西から)

e. A区SD6完掘状況 (西から)

図版 6 a. A区SF1土層断面 (北から)

b. A区SF1完掘状況 (北から)

図版 7 a. A区SV1土層断面 (南から)

b. A区SV1検出状況 (西から)

c. A区T1土層断面 (西から)

d. A区完掘全景 (西から)

図版 8 a. B区SB1土層断面 (北から)

b. B区SB1完掘状況 (北西から)

図版 9 a. B区SB2土層断面 (南西から)

b. B区SB2完掘状況 (北西から)

図版 10 a. B区SM1検出状況 (北東から)

b. B区SM1遺物群 1 出土状況 (東北から)

c. B区SM1土層断面 (南東から)

図版 11 a. B区完掘全景 (北から)

b. 報恩寺古墓群近景

(右から 3 番目が天正五年銘宝篋印塔)

図版 12. 出土遺物 1

図版 13. 出土遺物 2

図版 14. 出土遺物 3

図版 15. 出土遺物 4

I はじめに

報恩寺遺跡は、東広島市河内町入野字報恩寺2279-3、7775-5、字奥垣内7773-2、7775-3の一部に所在する。

本遺跡の発見と調査に至る経緯は、以下のとおりである。

平成23年4月22日付けで東広島市長（河内支所 産業建設課）から東広島市教育委員会教育長（以下「市教委」という。）へ市道整備事業大矢循環線道路改良工事の事業計画地内における、文化財等の有無及び取扱いについて協議があった。これを受けて、市教委は現地の分布調査を行い、計画地東側が中世寺院である報恩寺の所在地の可能性あることを確認した。また、計画地内に塚状の高まりがみられ、隣接地に宝篋印塔を中心とした古墓群が存在することなどから、平成23年4月27日付けで遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要な旨を回答した。

平成24年4月24日付けで東広島市長から試掘調査の依頼があり、市教委が試掘調査を実施した結果、計画地東側の一部で弥生土器が出土する段状遺構や土師質土器が出土する溝状遺構が検出されたため、平成24年5月11日付けで報恩寺遺跡を確認したことを回答した。

市教委と東広島市長は遺跡の現状保存について協議を重ねたが、現状保存が困難であるとの結論に達したため、発掘調査による遺跡の記録保存を図ることとなり、市教委が発掘調査を実施することになった。

これを受けて東広島市長から平成25年8月27日付けで埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の届出）が提出され、市教委は、事前の発掘調査が必要な旨を同日付けで通知した。その後、東広島市長から平成26年8月30日に発掘調査の依頼が提出され、市教委は、同日承諾する旨回答した。

発掘調査は平成25年10月15日から12月27日まで実施し、整理作業及び報告書作成作業は平成26年4月1日から平成27年3月20日まで行い、収蔵作業も実施した。

本書は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また、文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。

事業者である東広島市からは発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたっては、友安一成氏、塔迫 健氏はじめ地元の方々の多大なご協力を得た。なお、備前焼壺（報告番号37）については、保管者である友安義彦氏から資料の提供を受けた。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

調査体制

平成25年度

東広島市教育委員会

理事長：木村 清

生涯学習部長：林 芳和

次長兼文化課長：藤岡孝司

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調 査 調査係主査：中山 学、埋蔵文化財調査員：吉田由弥・杉原弥生

事 務 主査：萩原真司、事務職員：三上梨沙

平成26年度

東広島市教育委員会

教育長：木村清（～平成26年 6 月30日）、下川聖二（平成26年 7 月 1 日～）

生涯学習部長：大河 淳

次長兼文化課長：藤岡孝司

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

整 理 調査係主査：中山 学、埋蔵文化財調査員：吉田由弥・杉原弥生

事 務 主査：萩原真司、事務職員：片山由紀子

調査委託者

平成25年度

東広島市

市長：藏田義雄

河内支所産業建設課長：本坂浩次

担 当 産業建設課建設維持係主査：渡邊晶誉

平成26年度

東広島市

市長：藏田義雄

建設部道路建設課長：渡瀬年彦

担 当 道路建設課市道第 1 係主査：渡邊晶誉

Ⅱ 位置と環境

報恩寺遺跡の所在する東広島市河内町は、市域の東側に位置し、東は三原市本郷町、南は竹原市田万里町に隣接している。付近一帯は、地形学的には吉備高原面に属し、低い丘陵と河川によって形成された浸食谷を特徴とする。南北に長い町内のほぼ中央を沼田川が東西に流れ、その支流である椋梨川、入野川などの沼田川水系の小河川が曲流し、河岸段丘を形成している。

本遺跡は、町南部の入野地区を北に向かって流れる入野川の支流・大谷川東岸の丘陵上に位置しており、現在確認されている町内最南端の遺跡である。標高241.8mの丘陵頂部から南側斜面、それに続く棚田状の水田にまで遺跡は広がっているとみられる。遺跡名称の由来となった報恩寺本堂が所在していたと伝承されている“報恩寺田”は調査区の南西約60mの数段低い場所に位置している⁽¹⁾。棚田下は谷水田となっており遺跡所在地との比高差は約20mを測る。谷の南側は尾根が東西に延びて遮蔽されているため、袋状の地形となっており、報恩寺の寺域はその一帯に及んでいる可能性がある。それを裏付けるように“堂ヶマチ”や“ヤグラマチ”“大門”といった堂宇や門の存在を想定させる地名が各所に散在しており、今回の調査区の一部が所在する場所も“新田”と呼称されていることから、寺廃滅後に開墾された可能性をうかがわせている（第2図参照）。

また、遺跡周辺には古墓群も散在しており、調査区の南西約40mの地点には『芸藩通志』に「平賀氏墓」⁽²⁾と紹介されている3基の宝篋印塔を中心とする古墓群（以下「報恩寺古墓群」という。）が存在しており報恩寺との関連がうかがえる。また南東約70mの市道沿いにも数基の五輪塔からなる古墓群（以下「古墓群1」という。）が存在し、東側約300mの丘陵頂部には塚状基壇上に五輪塔が配置された古墓群（以下「古墓群2」という。）が存在し、過去に備前焼壺が出土している。

以下では、本遺跡周辺の河内町と近隣の遺跡について概観する。町内には、周知の遺跡が約150件あるが、市中心部の西条町や高屋町地域と比較して開発の件数が少なく、調査が実施された遺跡は限られている。

【旧石器時代】この時代の遺跡は現在まで町内では確認されていない。

【縄文時代】この時代の遺跡は本遺跡の周辺では確認されておらず、中河内の山居遺跡で、後期の土坑が調査されたほか、遺構に伴わないが、早期・中期の土器も出土している⁽³⁾。

【弥生時代】中期までの遺構や遺物は検出されておらず、後期になって若干みられるようになる。本遺跡の至近に位置する有田遺跡(2)では住居跡状の遺構が確認されている。有田2号遺跡(3)では弥生土器が採取されている。太郎丸1・2号遺跡(4)は弥生時代から古墳時代にかけて住居跡や箱形石棺が確認されている。竹下遺跡(5)では弥生終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡6軒と掘立柱建物跡が1棟調査されている⁽⁴⁾。柳原遺跡(6)では古墳時代後期のカマドを伴う竪穴住居跡や段状遺構が調査され、

土師器や須恵器も出土している⁽⁶⁾。惣田地遺跡(7)では後期前葉の竪穴住居跡が1軒調査されている⁽⁶⁾。墳墓では、入野中山遺跡(8)で箱式石棺17基・土坑4基が調査されている⁽⁷⁾。

【古墳時代】本遺跡の周辺では重広遺跡(9)、重広2号遺跡(10)で住居跡状の遺構が確認され、土師器や須恵器が採取されている。原口遺跡(11)では土師器や須恵器が出土している⁽⁸⁾。隣接する高屋町の山野上遺跡(12)は古墳時代の集落とみられる。河内町及びその周辺では、古墳は眼下に耕作地の広がる眺望の開けた丘陵上に立地していることが多い。前期では、前述の入野中山遺跡が挙げられる。箱式石棺や石蓋土坑を埋葬主体とする古墳で、入野川を望む丘陵緩斜面に構築されており、弥生時代から古墳時代にかけての人骨が計10体分出土している。

後期には、横穴式石室を埋葬主体とする円墳が盛んに築造される。遺跡の所在する入野地区は町内でも群集して築造されることが多く、本遺跡の周辺では有田峯古墳群(13)、獅子伏山古墳群(14)、龍王山古墳群(15)が挙げられる。単独ではあるが有田峯3号遺跡(16)では5世紀代の箱式石棺が調査され、人骨も検出されている⁽⁹⁾。

【古代】律令制下の当地区は『和名類聚抄』によると、沙田(豊田)郡に属し、郡域を構成した豊田・登能・入農の3郷のうち入農が当地区に比定される。

標高522mの篁山山頂にある竹林寺(17)は、室町時代の『紙本著色竹林寺縁起絵巻』(県重要文化財)によると天平2(730)年に行基によって創建されたとあり、平安時代の歌人小野篁の生誕地との伝承もある。境内には永正5(1511)年に建立された本堂(国重要文化財)、十王堂や護摩堂(いずれも市重要文化財)など多くの文化財がある。

【中世】本遺跡の周辺では有田峯1号遺跡(18)から土師質土器や古銭が採取されており集落跡の可能性もある。また打森神社遺跡(19)からは土師質土器が採取されており祭祀跡とみられる。このほかに生産遺跡として火の谷タタラ跡(20)がみられる。

南北朝時代以降、当地区は高屋保を本拠地とする平賀氏及びその一族入野氏の領域であったが、南に境を接する竹原小早川氏などとの対立から16世紀初頭には入野氏が滅亡している。町内にはそのような争いの激しさを表わすかのように数多くの城跡がみられる。本遺跡の周辺でも有田峯1号城跡(21)有田峯2号城跡(22)⁽¹⁰⁾、龍王山城跡(23)、薬師城跡(24)、松嶽城跡(25)などの城跡がみられ、薬師城跡では16世紀中葉の火災痕を伴う建物跡が調査され、土師質土器、瓦質土器、国産陶器、輸入磁器が多量に出土している⁽¹¹⁾。入野川以西では右京山城跡(26)、滝山城跡(27)、新開城跡(本・東・西城)(28)、入野川支流の惣田地川上流には猿田城跡(29)がみられる。

このほかに杣木には室町時代中期の応永二十五(1418)年の刻銘がみられた石造地像菩薩立像(30)(市重要文化財)が所在するほか、中世末の宝篋印塔を伴う隨行古墓(31)⁽¹²⁾もみられる。

参考・引用文献

- 『角川日本地名大辞典』34 広島県 角川書店 1987年
- 広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅱ』（呉市・東広島市・安芸郡・賀茂郡）1994年
- 河内町教育委員会『河内町の文化財』1990年
- (1) “報恩寺田”ほか地名については平成24年5月8・9日に試掘調査を実施した際に、担当者である東広島市教育委員会文化課吉野健志が地元住民の方から聞き取りを行った。
- (2) 「安芸国豊田郡七 墳墓」『芸藩通志』（復刻版）巻四 芸藩通志刊行会 1967年
同書には「平賀氏墓 入野村、報恩寺址にあり、碑面に、前武庫春巖香公禪定門、傍に、天正五丁丑二月日と刻す、平賀木工元相が墓といひ伝えれど、元相は、長門に移りければ、元相が父、広相にてもあるべきか、以下五基、共に報恩寺址にあり」とある。そのほかに人名の明らかなものでは「入野貞景墓」「禪定尼天安妙心（貞景室）」「友安越中守光久墓」「坂井掃部」などが紹介されている。無銘の五輪塔なども含めて十数基で本古墓群は形成されている。
- (3) 藤原彰子他『山居遺跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1991年
広本綱紀『山居遺跡―河内住宅団地現地地事務所建設に係る―』河内町教育委員会 1991年
石垣敏之他『山居遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 2012年
- (4) 葉杖哲也、中田健一「竹下遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(X)』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994年
- (5) 尾崎光伸、林 健亮「柳原遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (IX)』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1993年
- (6) 飯田米秋他『惣田地遺跡発掘調査報告書』惣田地遺跡発掘調査団 1993年
- (7) 恵谷泰典他『入野中山遺跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994年
- (8) 宗本正記、向井康博『原口遺跡発掘調査報告書』河内町教育委員会 1993年
- (9) 中山 学、増田晴美「有田峯3号遺跡発掘調査報告書」『市内遺跡緊急調査報告書Ⅱ』財団法人東広島市教育文化振興事業団 2013年
- (10) 本城跡をはじめ松嶽城跡、薬師城跡、滝山城跡、新開城跡（本・東・西）については、下記文献に縄張りなどの報告がある。
『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集 広島県教育委員会 1994年
- (11) 渡辺昭人他『薬師城跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1996年
- (12) 中山 学、向井順子「随行古墓発掘調査報告書」註（9）の文献と同じ。



- | | | | |
|-------------|--------------|------------|------------------|
| 1. 報恩寺遺跡 | 2. 有田遺跡 | 3. 有田2号遺跡 | 4. 太郎丸1・2号遺跡 |
| 5. 竹下遺跡 | 6. 柳原遺跡 | 7. 惣田地遺跡 | 8. 入野中山遺跡 |
| 9. 重広遺跡 | 10. 重広2号遺跡 | 11. 原口遺跡 | 12. 山野上遺跡 |
| 13. 有田峯古墳群 | 14. 獅子伏山古墳群 | 15. 龍王山古墳群 | 16. 有田峯3号遺跡 |
| 17. 竹林寺 | 18. 有田峯1号遺跡 | 19. 打森神社遺跡 | 20. 火の谷タラ跡 |
| 21. 有田峯1号城跡 | 22. 有田峯2号城跡 | 23. 龍王山城跡 | 24. 薬師城跡 |
| 25. 松嶽城跡 | 26. 右京山城跡 | 27. 滝山城跡 | 28. 新開城跡(本・東・西城) |
| 29. 猿田城跡 | 30. 石造地像菩薩立像 | 31. 隨行古墓 | |

第1図 報恩寺遺跡と周辺遺跡分布図 (1:25,000)

Ⅲ 調査の概要

発掘作業の概要

今回の発掘調査は試掘調査によって確認された2つの調査区（A・B区）について実施した。A区は想定される遺跡範囲の東端に位置し、東側が約0.5m高い2枚の水田の一部である。標高は約235mを測り、“報恩寺田”より約4m高い位置にある。B区はその北西側の丘陵部で山林であった。標高は230～238mを測った。

試掘調査では各調査区に3本のトレンチを設定して遺跡を確認しており、A区からは土坑や溝が検出され、土師質土器が出土した。また調査区内では遺構面まで約0.6mの厚さの黒色土（田肥土）や褐灰色土、橙色砂質土の堆積土がみられた。B区では段状遺構が検出され、弥生土器や土師器が出土した。調査内では遺構面まで約0.3mから1mの厚さの黄橙色や黄褐色の堆積土がみられた。また調査区南西隅には塚状地形が確認できた。

発掘調査はまず試掘調査のデータを基に重機を使用して堆積土を掘削し、その後、遺構検出面の精査を人力で行った。その結果、A区では東側の高い部分で広範囲に丘陵斜面に盛土を行った整地土面が検出され、土坑や溝状遺構、道状遺構が確認された。低い部分では土坑や溝状遺構が複数検出された。B区では段状遺構が検出された。

調査で検出された遺構は、A区で土坑8基、溝8条、石列1列、道1条、B区で段状遺構2基、塚1基であった。

出土遺物は弥生土器、土師器、土師質土器、陶磁器、赤瓦、砥石、鉄滓であった。

整理作業の概要

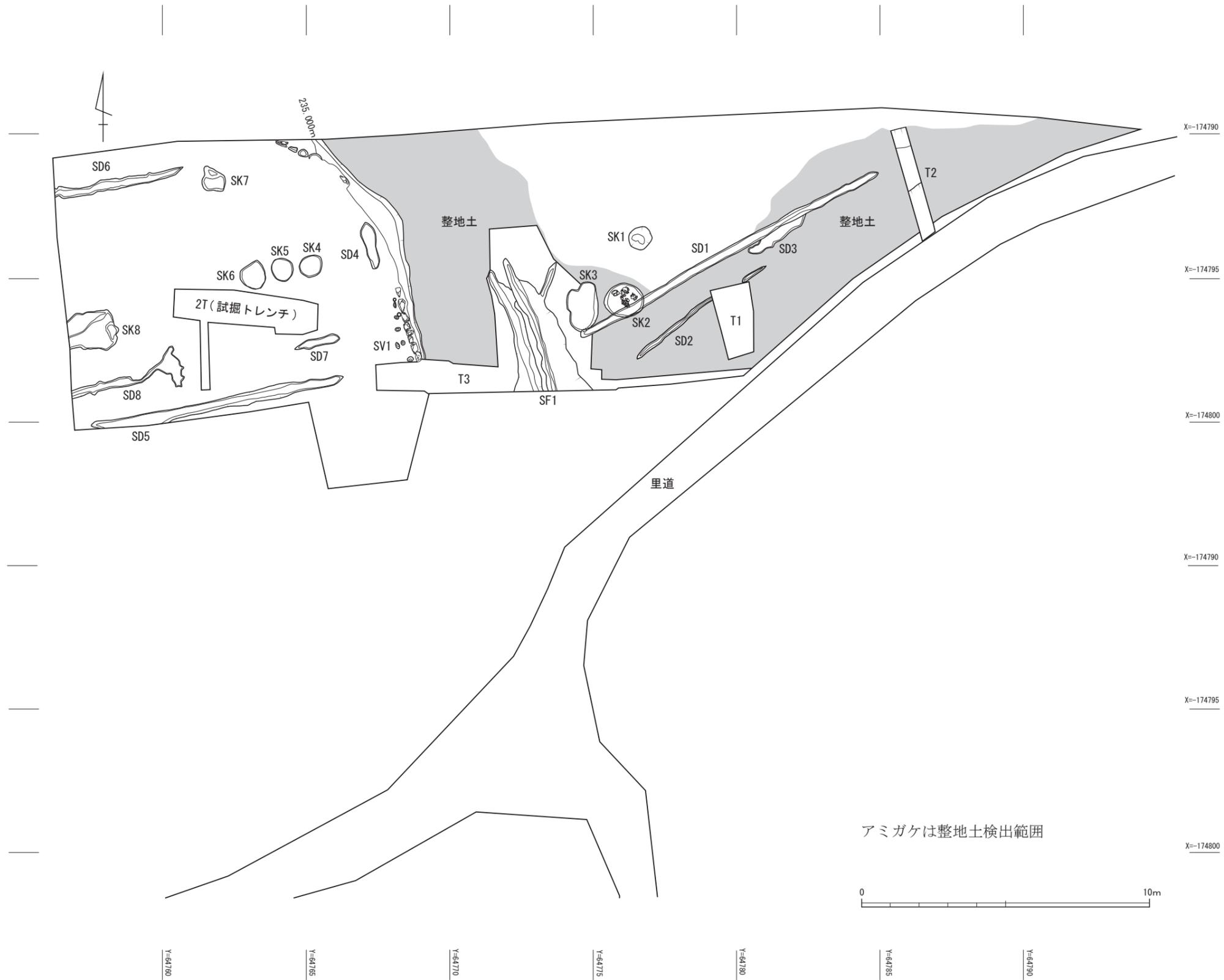
出土した遺物は、水洗と注記を実施した後、接合と復元、実測・写真撮影などの作業を行った。整理・報告書作成作業と並行して、保管のための分類・収蔵作業も実施した。



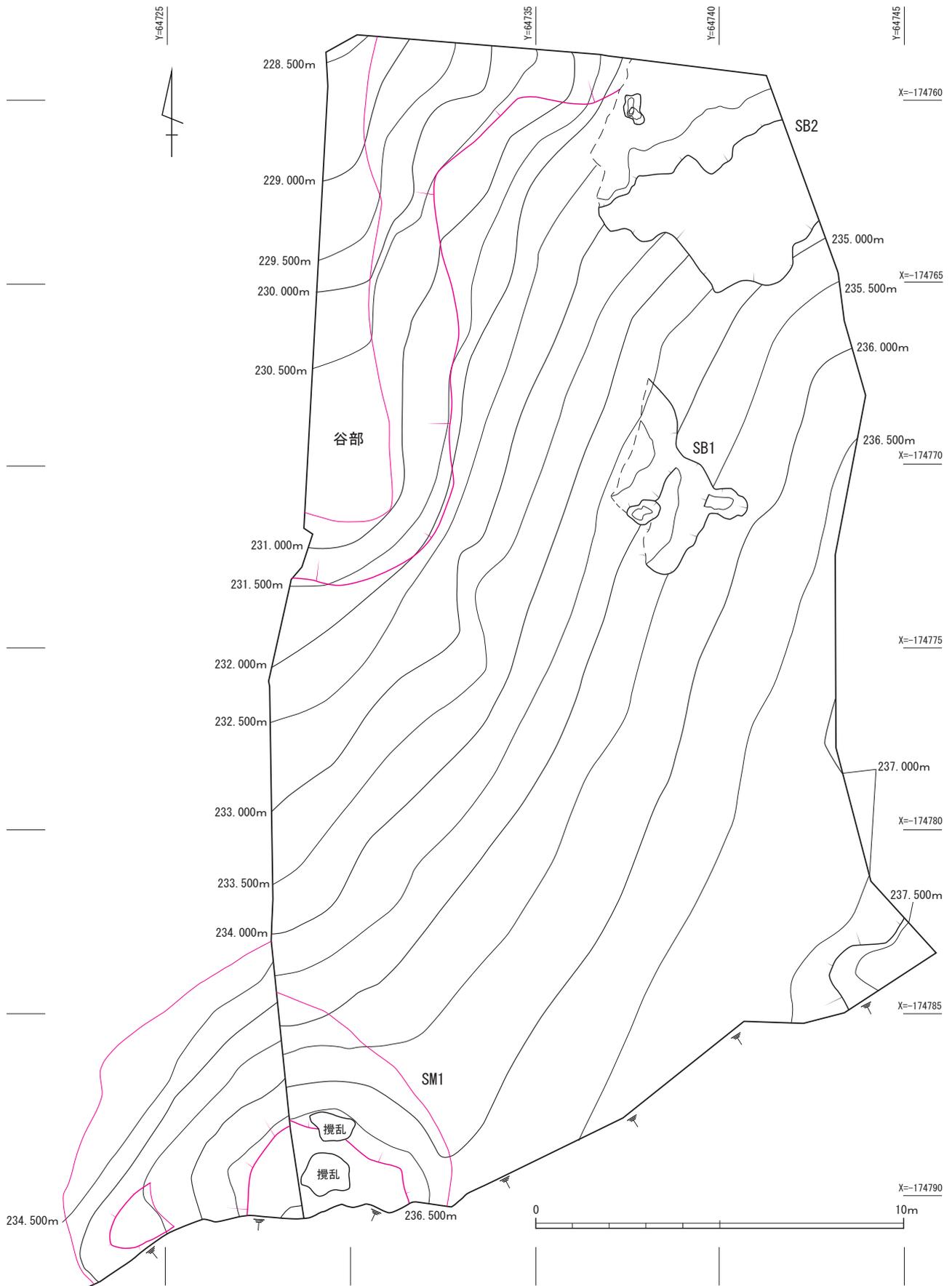
B区塚状地形（SM1）調査状況



第2図 報恩寺遺跡調査区と周辺地形図 (1:2,500)



第3図 A区遺構配置図 (1:150)



第4図 B区遺構配置図 (1:150)

IV 遺構と遺物

(1) 遺構

A区(第3図、図版7)

A区の東側3分の2は西側より約0.5m高く、約0.3mの黒色土(田肥土)下にほぼ同じ厚さの褐灰色土や橙色砂質土の堆積土がみられた。その直下には近世以降に造成された灰黄褐色土や明赤褐色土の整地土で造成された平坦面が広がっている。その整地土を切り込むように検出された溝状遺構や土坑は近世後半から近代以降の遺構と考えられる。整地土下からは弥生時代の貯蔵穴とみられる土坑と中世の道が検出された。

西側も褐色や黄褐色の整地土が南側を中心に広がっているが、分布は均一ではなく範囲は不明瞭であった。土坑や溝が複数検出されたが、一部はこの整地土上から掘り込まれていた。また東側との境になる段直下で石列が検出された。

出土遺物は弥生土器、土師質土器、近世陶磁器、赤瓦、鉄滓が出土している。

SK1(第5図、図版2)

調査区中央からやや東側で検出されたほぼ円形の土坑である。規模は、直径約0.8m、深さ約0.1mを測る。底面の形状は楕円形で長軸約0.45m、短軸約0.2mを測る。

遺物は、出土しなかった。

SK2(第5図、図版2)

SK2の南西側約1mで検出されたやや楕円形の土坑である。規模は、長軸約1.35m、短軸約1.2m、深さ約0.5mを測る。底面の形状も楕円形で長軸約1.2m、短軸約1.1mを測る。南側がSD1に切られている。

遺物は、1層から弥生土器が出土した。

SK3(第5図、図版2)

SK2の西側で検出された楕円形の土坑である。規模は、長軸約1.75m、短軸約1.1m、深さ0.1mを測る。調査区東側に広がる整地土を掘り込み、かつ南側はSD1に切られている。SD1からは近現代の染付磁器片が出土していることから、SK3の時期はそれ以前とみられる。

遺物は、出土しなかった。

SK4(第6図、図版3)

調査区中央から西側で検出されたほぼ円形の土坑である。西側にはSK5・6が連続して掘り込まれている。規模は、直径約0.8m、深さ約0.2mを測る。底面の形状もほぼ円形で直径0.75mを測る。

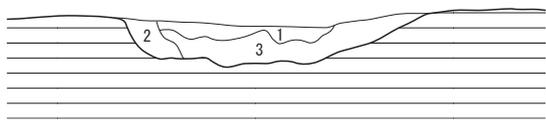
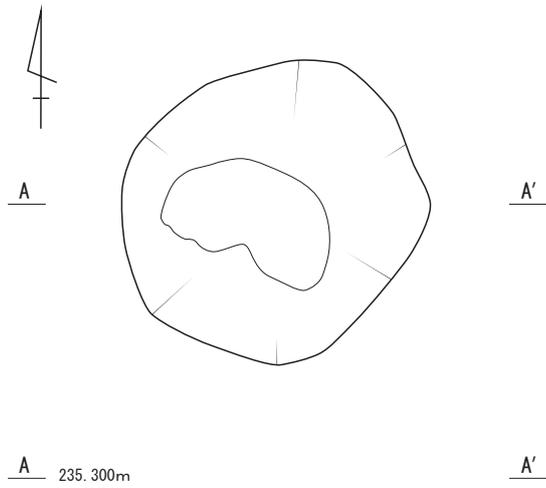
遺物は、出土しなかった。

SK5(第6図、図版3)

SK4の西側で検出されたほぼ円形の土坑である。規模は、直径約0.8m、深さ約0.2mを測る。底面の形状はやや楕円形で長軸約0.8m、短軸約0.7mを測る。

遺物は、出土しなかった。

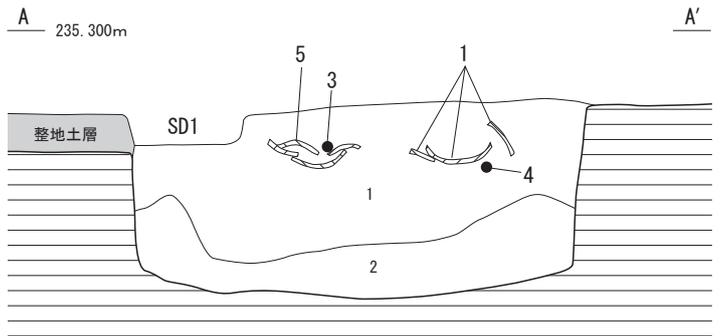
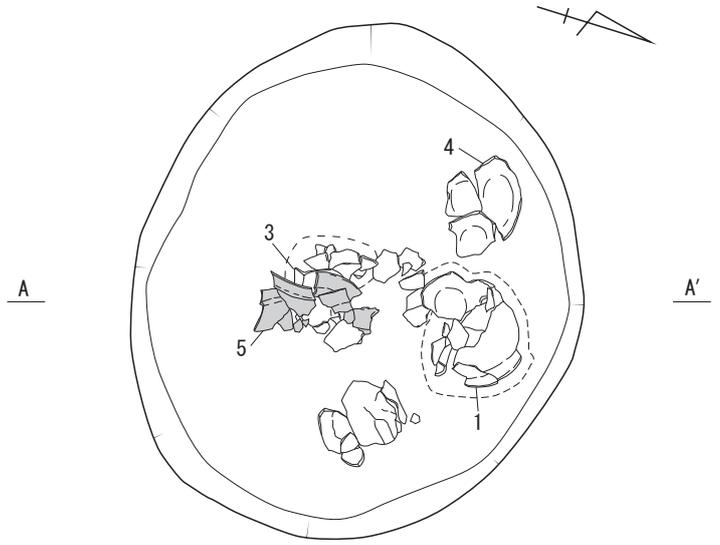
SK1



土層説明

- 1 黒褐色土
- 2 黒色土+灰白色粘質土(しまりあり)
- 3 黄橙色土

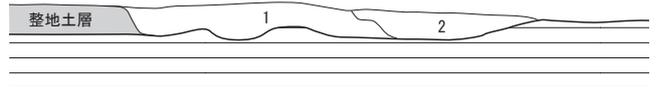
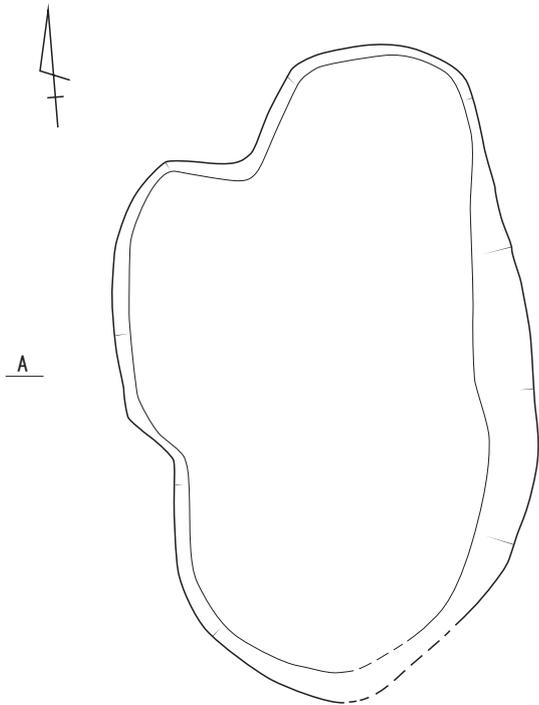
SK2



土層説明

- 1 にぶい黄褐色土(炭粒を多く含む)
- 2 明黄褐色土

SK3

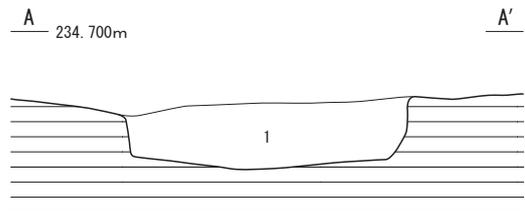
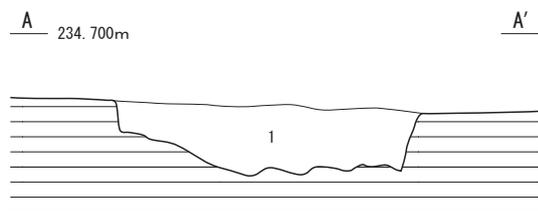
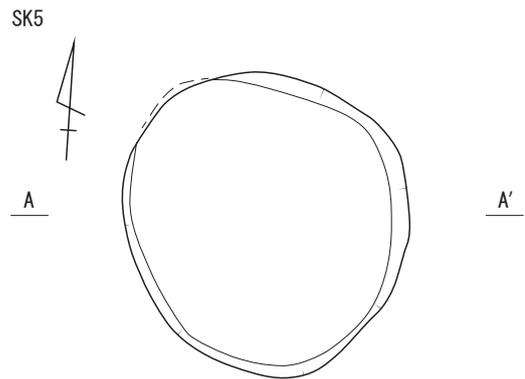
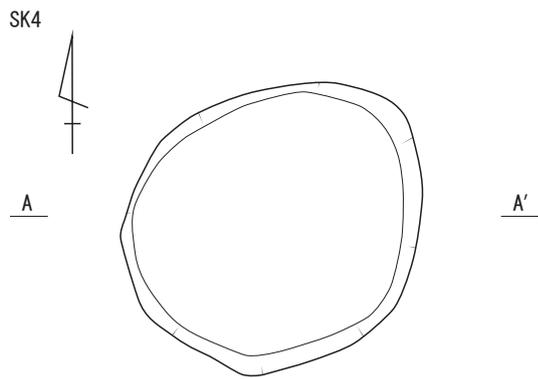


土層説明

- 1 灰黄褐色土
- 2 黒褐色土



第5図 A区SK1~3実測図 (1:20)

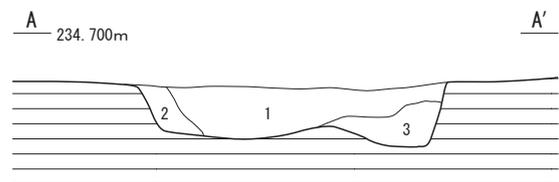
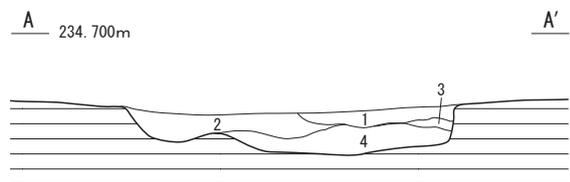
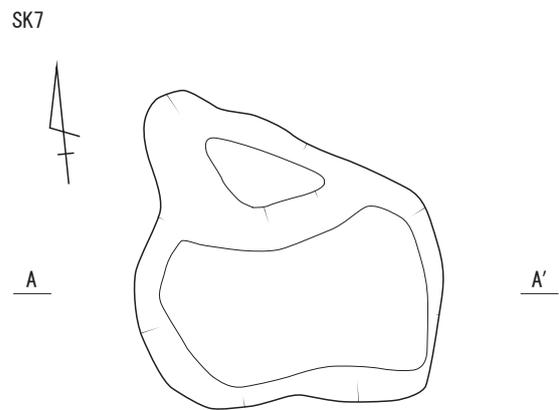
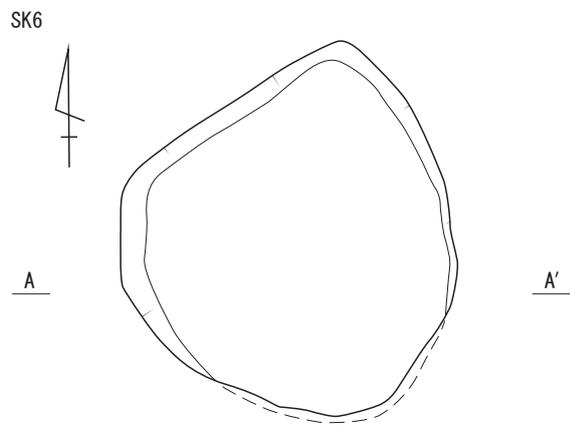


土層説明

1 灰黄褐色土(炭粒を含む)

土層説明

1 にぶい黄褐色土

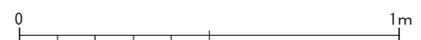


土層説明

- 1 明黄褐色砂質土(しまりあり)
- 2 褐灰色土
- 3 褐灰色土(2層より淡い)
- 4 黒褐色土(炭粒を含む)

土層説明

- 1 褐灰色砂質土(しまりあり)
- 2 にぶい黄橙色土(しまりあり)
- 3 明黄褐色土(しまりあり)



第6図 A区SK4~7実測図 (1:20)

SK6 (第6図、図版3)

SK5の西側で検出されたいびつな三角形の土坑である。規模は、長軸約1.0m、短軸0.9m、深さ約0.1mを測る。底面の平面形も三角形で長軸約0.95m、短軸約0.8mを測る。遺物は、出土しなかった。

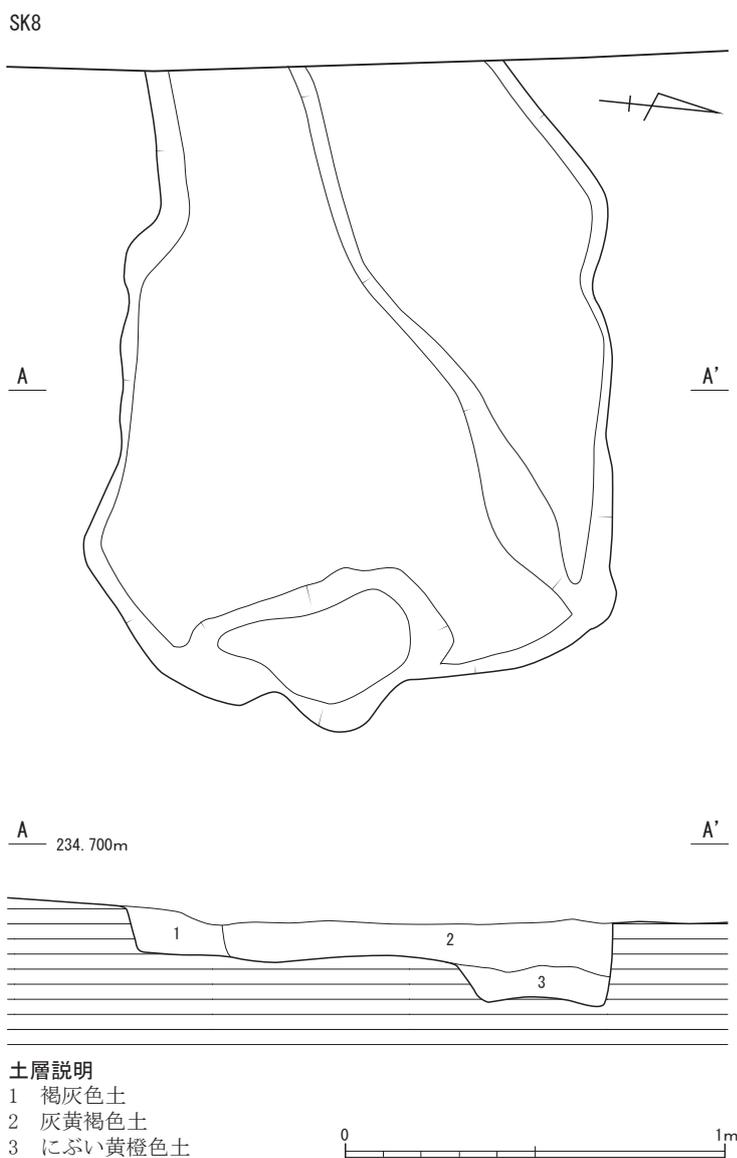
SK7 (第6図、図版3)

調査区西側で検出されたいびつな三角形の土坑である。規模は、長軸約1.0m、短軸0.85m、深さ約0.15mを測る。北側の一部が若干高くなっている。

遺物は、1層から土師質土器片、赤瓦片が出土した。時期は近世以降とみられる。

SK8 (第7図、図版4)

調査区西端で検出された長方形の土坑で、西側は調査区外に延びている。規模は、長軸約1.75m、短軸1.4m、北側が低くなっているため、深さは北側で0.2m、南側が約0.1mを測る。



第7図 A区SK8実測図 (1:20)

遺物は、2層から土師質土器土片や同じく土瓶把手片、褐色釉陶片、染付磁器椀片が出土した。

SD1 (第8図、図版4)

調査区東側で検出された直線的な溝である。規模は、長さ約11.8m、幅0.25～0.35m、深さ約0.1mを測る。調査区東側に広がる整地土を掘り込んでいる。また南側のSD3を切っている。

遺物は、1層から近現代の染付磁器片が出土した。

SD2 (第8図、図版4)

SD2の南側でほぼ並行して検出された直線的な溝である。規模は、長さ約5.5m、幅0.1～0.2m、深さ約0.05mを測る。調査区東側に広がる整地土を掘り込んでいる。

遺物は、出土しなかった。

SD3 (第8図、図版4)

SD2の南側に位置し、SD2に切られている直線的な溝である。規模は、長さ約2.3m、幅0.3m、深さ約0.1mを測る。調査区東側に広がる整地土を掘り込んでいる。

遺物は、出土しなかった。

SD4 (第3図、図版5)

調査区西側の一段低い面から検出された溝であるが、きわめて浅く形状も不明瞭である。規模は、長さ約1.6m、幅0.5m、深さは約0.03mを測る。

遺物は、出土しなかった。

SD5 (第9図、図版5)

調査区南西側の一段低い面から検出された直線的な溝である。規模は、長さ約9m、幅0.3～0.5m、深さは約0.3mを測る。

遺物は、出土しなかった。

SD6 (第10図、図版5)

調査区北西側の一段低い面から検出された直線的な溝である。西側は調査区外に伸びているがきわめて浅くなっている。規模は、検出長約4.5m、幅0.3～0.4m、深さは約0.2mを測る。

遺物は、出土しなかった。

SD7 (第9図、図版5)

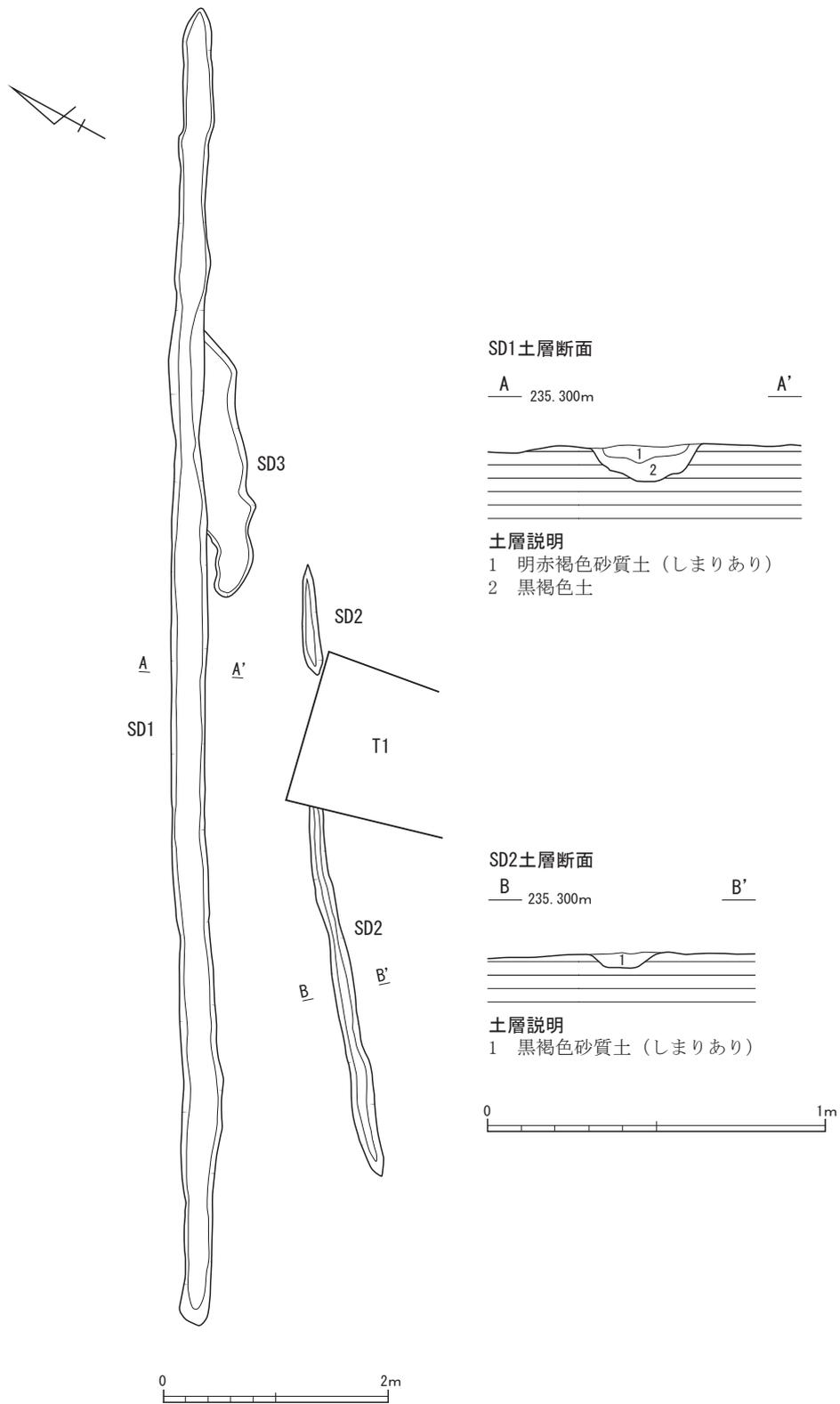
SD5の北側で検出された直線的な溝である。規模は、長さ約1.6m、幅0.25～0.35m、深さは約0.05mを測る。

遺物は、出土しなかった。

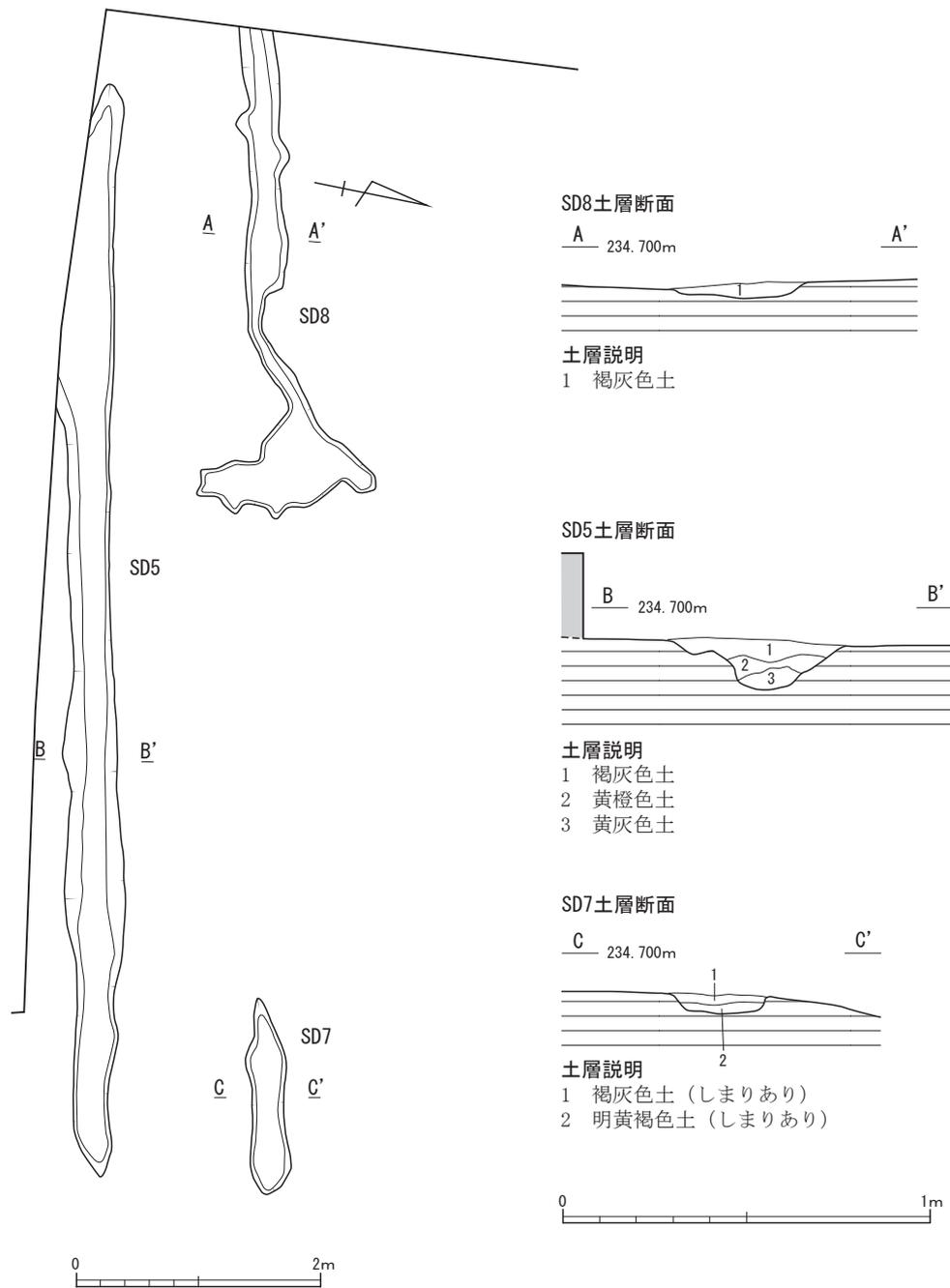
SD8 (第9図、図版5)

SD5の北西側で検出された直線的な溝で、西側は調査区外に伸びているが、きわめて浅くなっている。東側は三角形に開いている。規模は、検出長約4m、幅0.1～0.3m、東側は1.5mに広がっている。深さは約0.1mを測る。

遺物は、出土しなかった。



第8図 A区SD1~3実測図 (平面図1:60、断面図1:20)



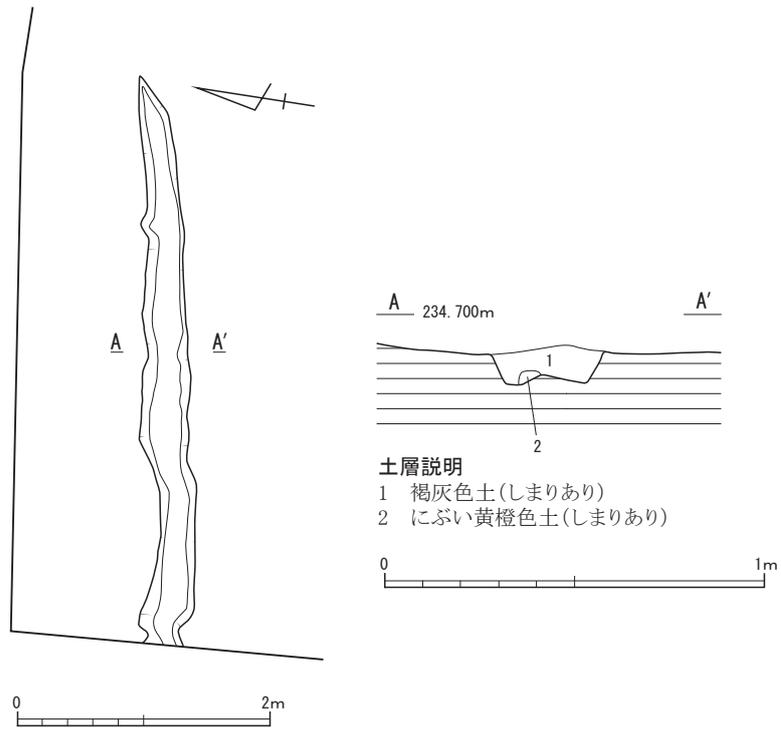
第9図 A区SD5・7・8実測図 (平面図1:60、断面図1:20)

SV1 (第11図、図版7)

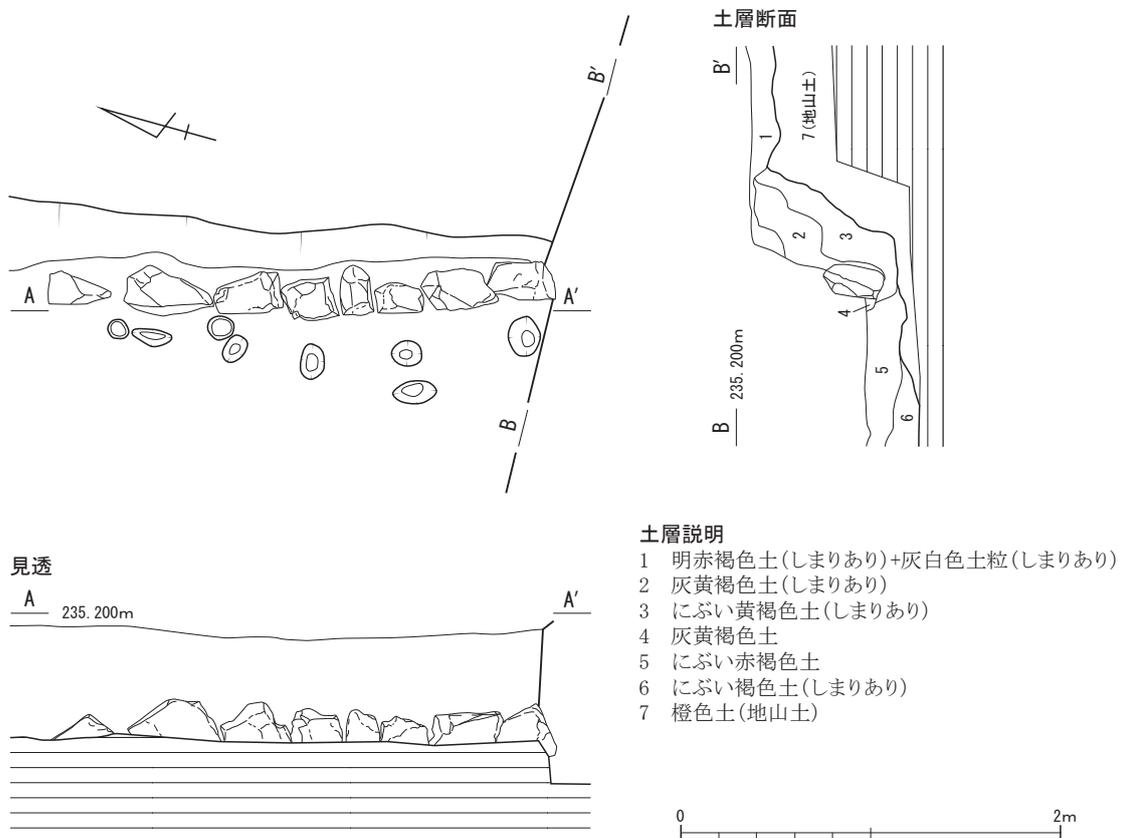
調査区の東西を分ける段直下で検出された石列である。規模は、長さ約2.6mで8個の石を段直下に沿うようにほぼ南北方向に並べている。調査区西側の整地土である5層を掘り込んで構築されていることから近世から近代以降とみられる。検出中に覆土から複数の石が検出されていることから、当初は石垣であった可能性もある。西側にはピット8個検出されているが関連は不明である。

また調査区北側でも段直下に数個の石とピットが検出されている。

遺物は、出土しなかった。



第10図 A区SD6実測図 (平面図1:60、断面図1:20)

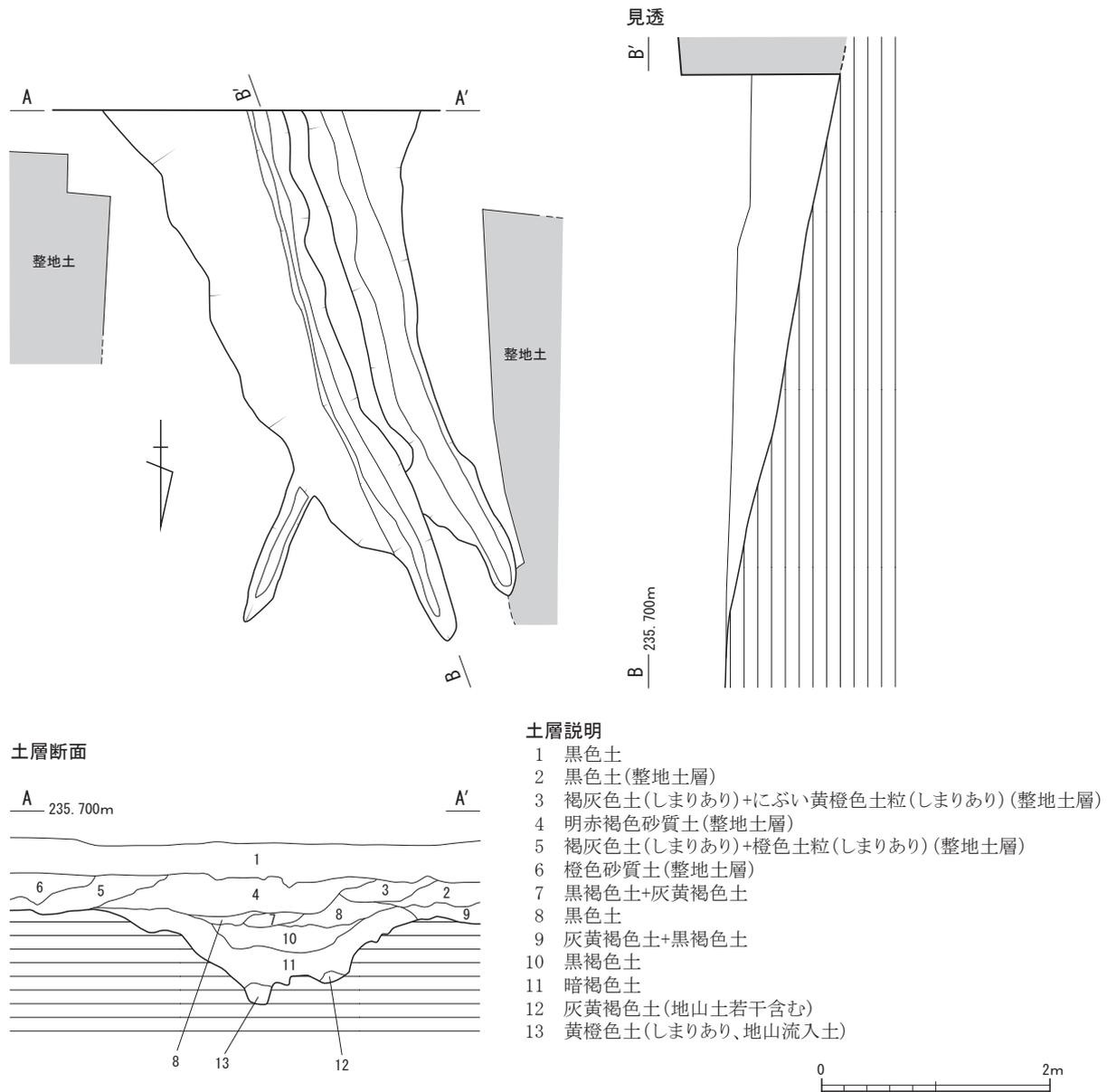


第11図 A区SV1実測図 (1:40)

SF1 (第12図、図版6)

調査区中央南側の整地土(2~6層)による平坦面下から検出された道で、北側は調査区平坦面まで延びてから細くなって途切れ、南側は傾斜して調査区外に延びている。規模は、検出長約5m、南側で幅約2.8m、深さは約0.8mを測る。底面幅は約0.9mで東西に流水によるとみられる溝があるため平坦ではない。

遺物は、埋土上層(10・11層上位)から土師質土器皿・土鍋片、備前焼体部、磁器片、鉄片が出土した。



第12図 A区SF1実測図 (1:60)

T1・2（第13図、図版7）

本章冒頭でも述べたようにA区では灰黄褐色土や明赤褐色土の整地土による平坦面が東側に広がっており、その堆積状況を確認するためにトレンチを2ヶ所設けた。

T1では橙色砂質土とにぶい黄褐色土からなる整地土（1層）が厚さ0.15～0.3m確認された。いずれも有機質を含まない均一な土質であり、一挙に埋め立てた状況が窺えた。

T2で明確に整地土と判断できるのは黄橙色砂質土（1層）と灰黄褐色土（2層）で、1層はいわゆる真砂土と呼称しているものと同じ土質であった。3層は炭粒や有機質を多く含み黒褐色を呈しているため自然堆積土の可能性が高いが、波打つように堆積している下面とは異なって上面は平坦であることから、元々あった堆積土の上面を整えた可能性がある。

遺物は、1・2層から土師質土器皿・土鍋片が出土した。時期は中世末までのものであり、これらが細片となって整地土内には含まれていることから、平坦面の構築時期は中世末以降と考えられる。その目的は不明であるがこの場所が“新田”と呼称されていたことから、田圃をはじめとする農地の拡張にともなうものと考えられる。

B区（第4図、図版11）

B区は全体が丘陵斜面であり、南東側の最高所と北西側の谷部との調査後の比高差は約9mを測った。調査区最高所では約0.3m、谷部では1mを越える黄橙色土や黄褐色土の堆積土がみられた。調査区北側では住居跡とみられる段状遺構が2ヶ所検出され、調査区南西隅では塚が確認された。

出土遺物は弥生土器、土師器、土師質土器、近世陶磁器、赤瓦、砥石、鉄滓が出土している。

SB1（第14図、図版8）

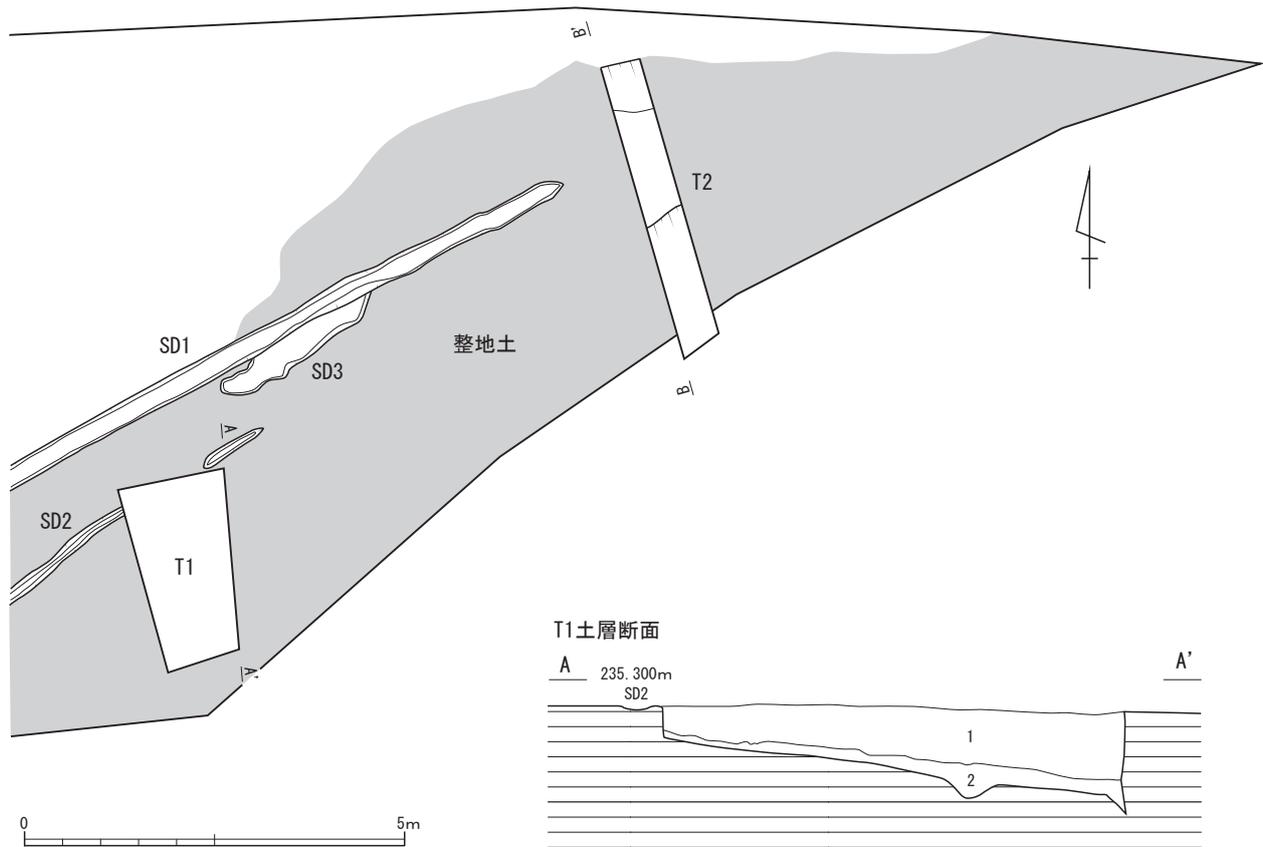
調査区の中央部からやや北側で検出された段状遺構である。平面形は方形を呈するとみられるが、斜面に位置するためほとんど削平され、西側は特に流失して、形状は不明瞭である。平坦面は二段になっており、柱穴とみられるいびつな楕円形のピットが1個検出された。深さは約0.2mを測る。検出規模は、南北方向約5.4m、東西方向約3.7m、深さ0.4mである。住居跡の可能性もあるが判然としない。

遺物は、出土しなかった。

SB2（第15図、図版9）

調査区の北東隅で検出された段状遺構である。調査区外に延びているため、平面形は判然としないがさらに北東方向に延びて長方形を呈しているとみられる。斜面に位置するため、削平され西側平坦面は特に流失している。斜面を3.5～4m程度谷部に向かって浅く削り、その後やや深く掘り込んで平坦面を造り出している。平坦面では柱穴とみられるいびつな方形のピットが1個検出された。深さは約0.3mを測る。検出規模は、南北方向約7.4m、東西方向約6m、深さ0.4mである。住居跡の可能性もあるが判然としない。

遺物は、3層から土師器片が出土した。

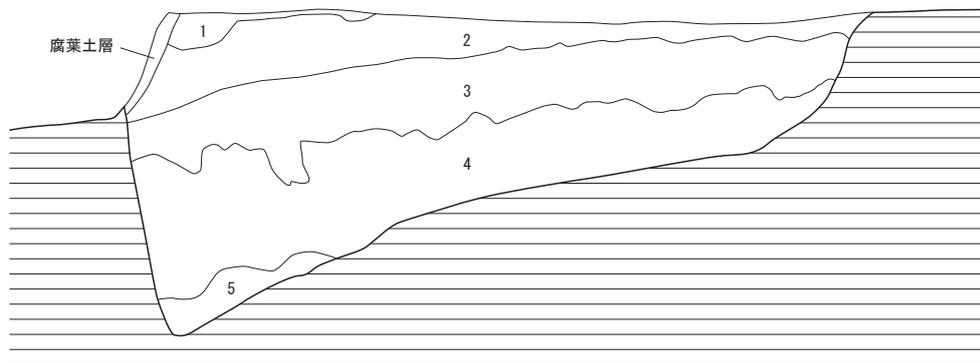


土層説明

- 1 橙色砂質土+にぶい黄褐色土（整地土層）
- 2 黒褐色土

T2土層断面

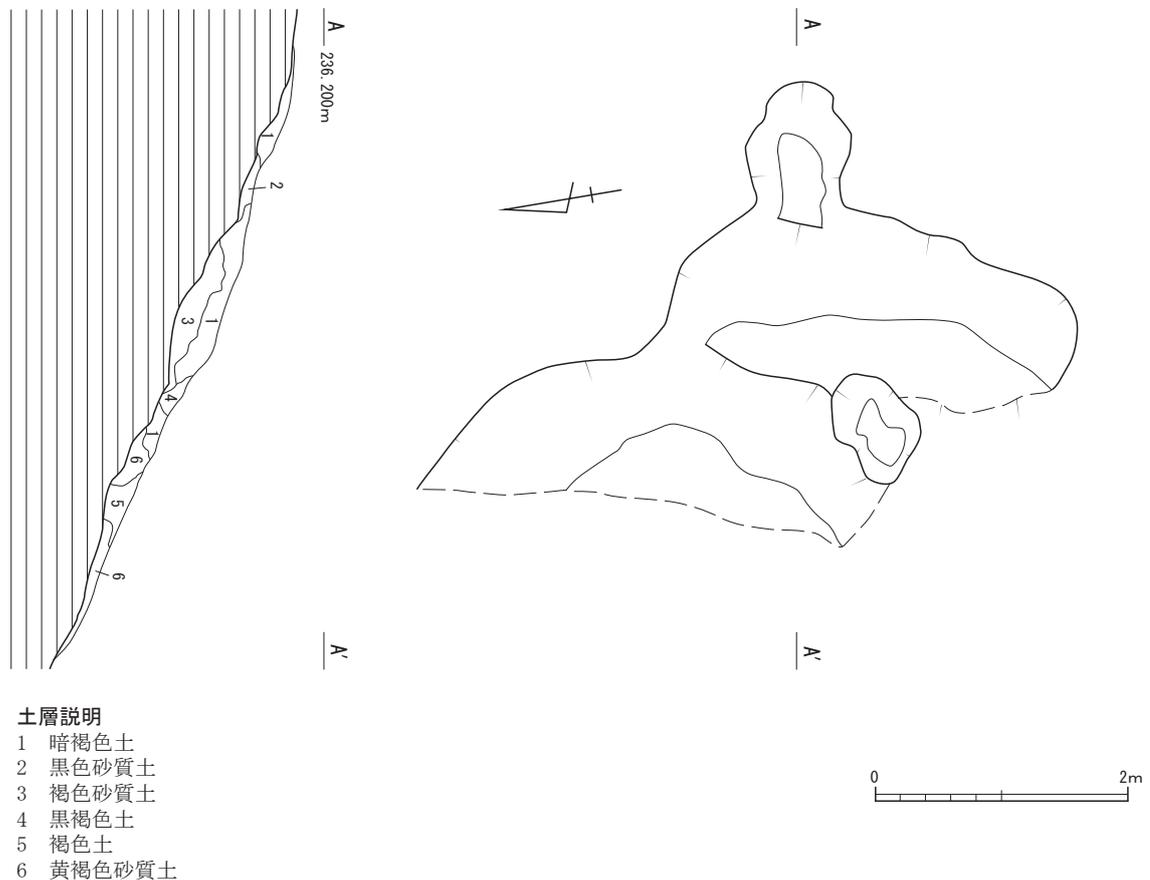
B 235.300m B'



土層説明

- 1 黄橙色砂質土（真砂土，整地土層）
- 2 灰黄褐色土（整地土層）
- 3 黒褐色土（炭粒多い。整地土か）
- 4 暗褐色土
- 5 にぶい橙色土（地山流入土）

第13図 A区T1・2実測図（平面図1:100、断面図1:40）



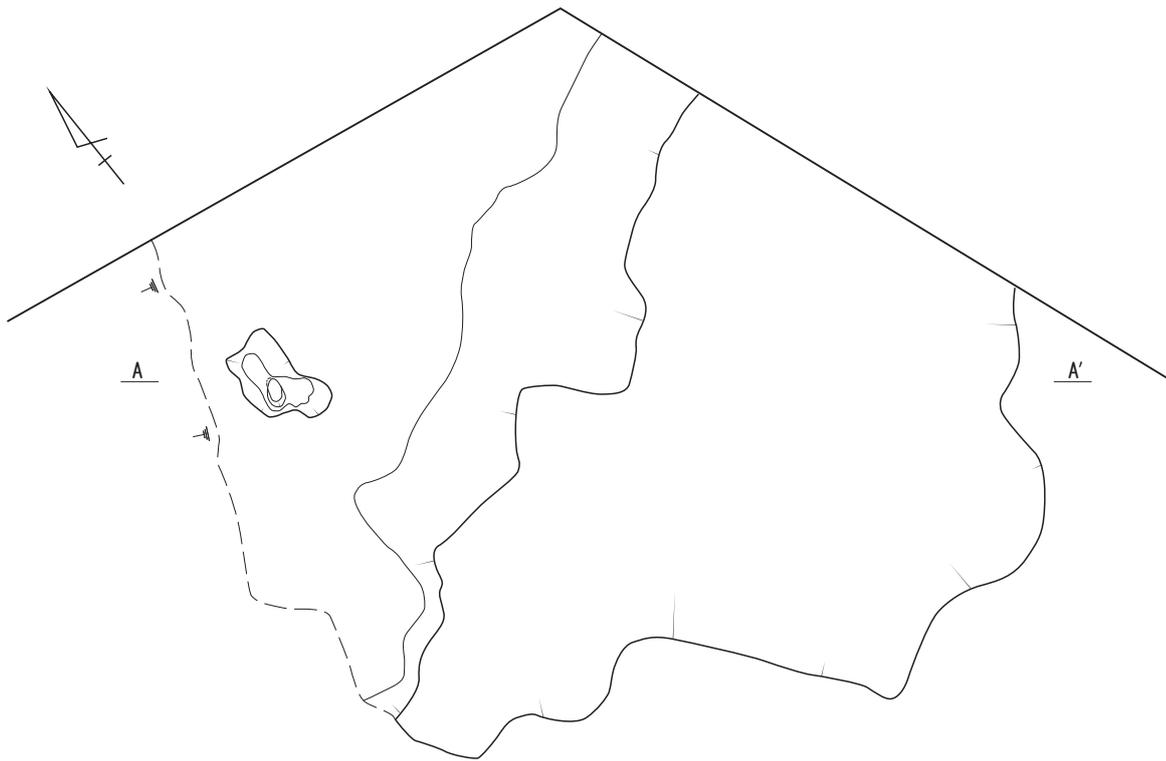
第14図 B区SB1実測図 (1:60)

SM1 (第16図、図版10)

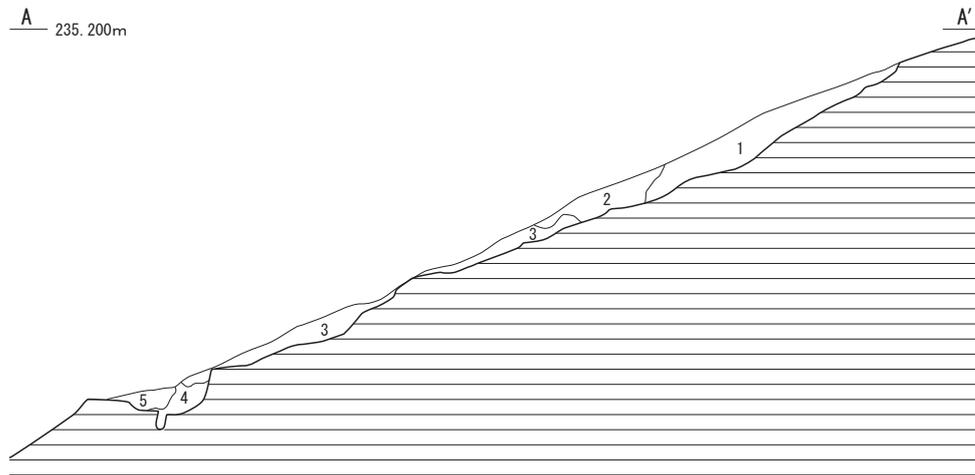
調査区南東隅で検出された塚である。調査区内には東側の4分の1程度がかかっているにすぎず、西側は調査区外、南側は削平されている。西側に隣接して報恩寺古墓群や“報恩寺田”へと通じる里道が通過しており、その道が小規模な尾根鞍部に達する直前に位置していることから、いわば峠に隣接して立地しているといえよう。

規模は、直径約10m、高さ約2mを測る。頂部に大木が2本存在していた。5cmほどの腐葉土を除去すると盛土が検出され、断ち割りを行ったところ褐色土で塚基底を形成し、その後、明赤褐色土や明黄褐色土を盛り上げて塚上部を形成していた。検出面からは墓坑などは検出されなかった。

遺物は、北東側の腐葉土直下の盛土検出面と1層、4層上位から土師質土器、近世陶磁器、赤瓦、砥石、鉄滓が出土した。特に検出面とその直下の4層上位には遺物が集中しており、これらは塚の傾斜面を流れ落ちるように堆積していた。



A 235.200m

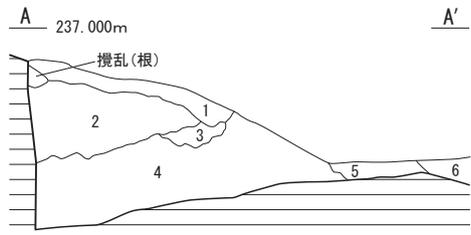
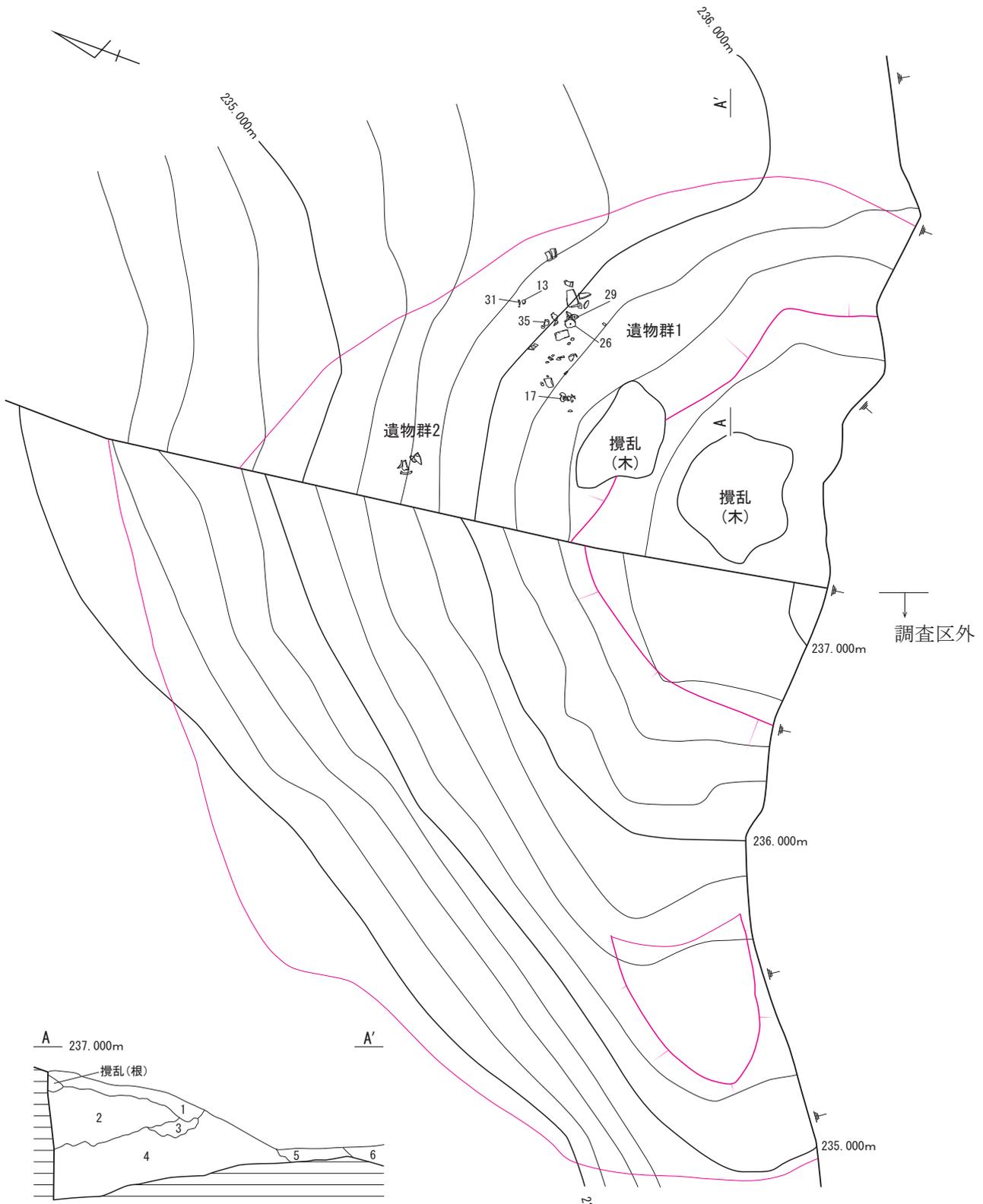


土層説明

- 1 にぶい黄褐色土+にぶい黄橙色土
- 2 褐色土
- 3 灰黄褐色土
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 にぶい褐色土



第15図 B区SB2実測図 (1:60)



- 土層説明**
- | | | |
|-------------|---------|-----------|
| 1 明黄褐色砂質土 | } SM1盛土 | 5 にぶい黄橙色土 |
| 2 明赤褐色砂質土 | | 6 橙色土 |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 | | |
| 4 褐色土 | | |



第16図 B区SM1実測図 (1:60)

(2) 遺物

A区SK2 (第17図1～5、図版12)

1～3は弥生土器の甕である。1の口縁部は「く」字状に強く外反し、端部はナデにより平坦になっている。風化が著しいが、体部内面にはヘラケズリが施されており器壁は5mm程度と薄い。2・3は「く」字状に外反する口縁部をもち、端部はナデにより平坦になっている。

4は弥生土器の甕か壺の体部で、ほぼ丸底になるとみられる。外面にはハケメが施され、ススが付着している。

5は二重口縁をもつ弥生土器の甕である。外反する頸部の上に外傾気味に直立する口縁部をもち、体部の外面はハケメが施され、ススが付着している。

いずれも、弥生時代終末期～古墳時代前期のものと考えられる。

A区調査区褐色堆積土 (第17図6、図版12)

6は陶器の椀である。体部外面に2条の沈線文がめぐらされ、内外面には鉄釉が施されている。

A区2T (試掘トレンチ) (第17図7・8、図版12)

7・8は土師質土器である。7は把手付鍋である。把手は体部成形後に貼り付けられている。8は鍋の口縁部である。両者とも外面にススが付着している。

A区SK6直下整地土 (第18図9、図版13)

9は陶器の播鉢である。口縁部には内外面に沈線文がめぐらされて、自然釉がかかっている。内面には8条1単位のクシメが放射状に施されている。18世紀代のものと考えられる。

B区調査区南東側黄橙色堆積土 (第19図10、図版13)

10は弥生土器の二重口縁をもつ壺である。外反する頸部端を疑口縁とし、その上に粘土紐を貼り付けて口縁部としたもので、外面に波状文が施されている。弥生時代終末期～古墳時代前期のものと考えられる。

B区調査区黄橙色堆積土 (第19図11、図版13)

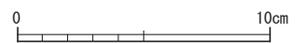
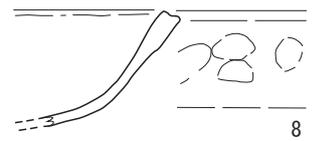
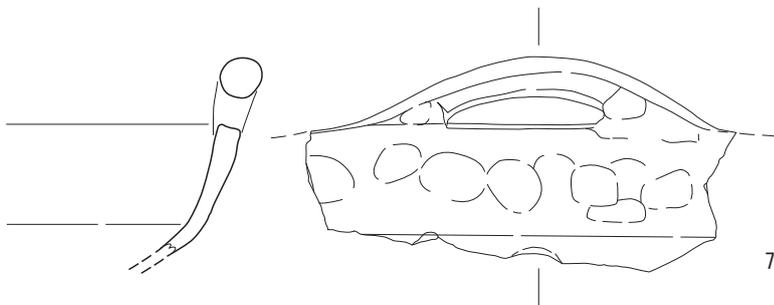
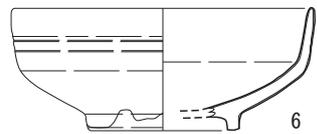
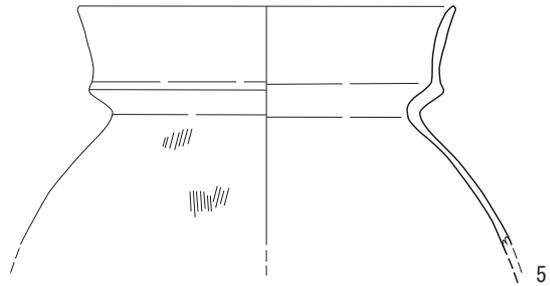
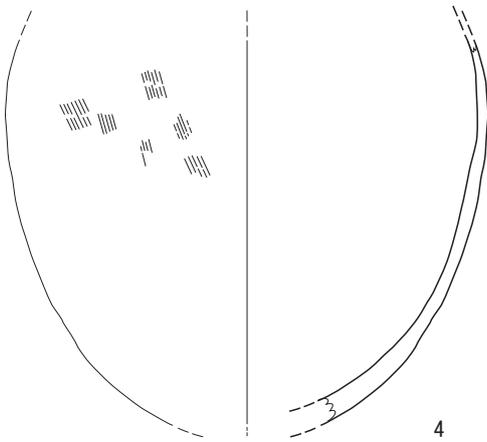
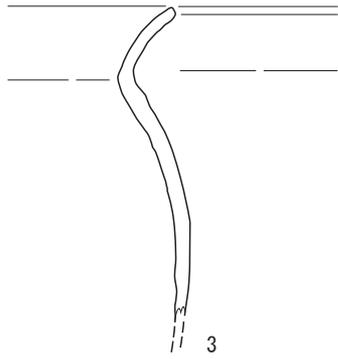
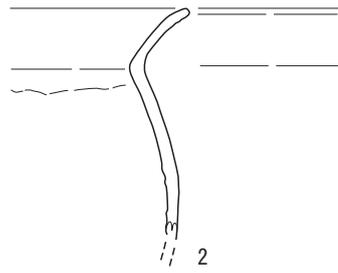
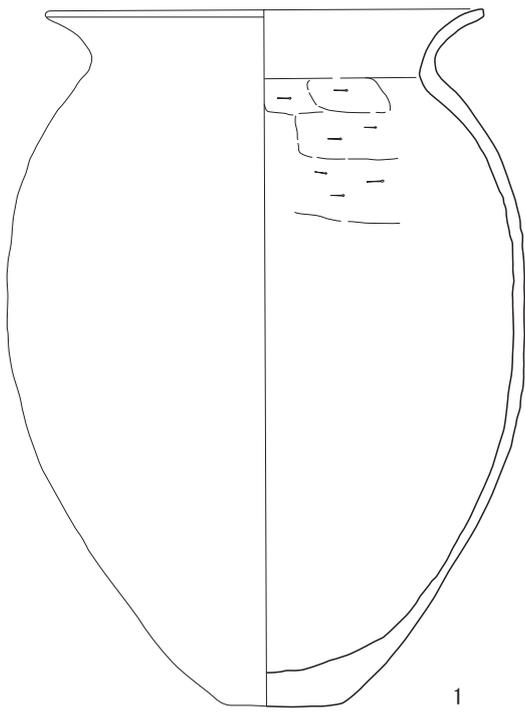
11は弥生土器である。内側はヘラケズリにより器面調整が施されている。

B区SB2 (第19図12、図版13)

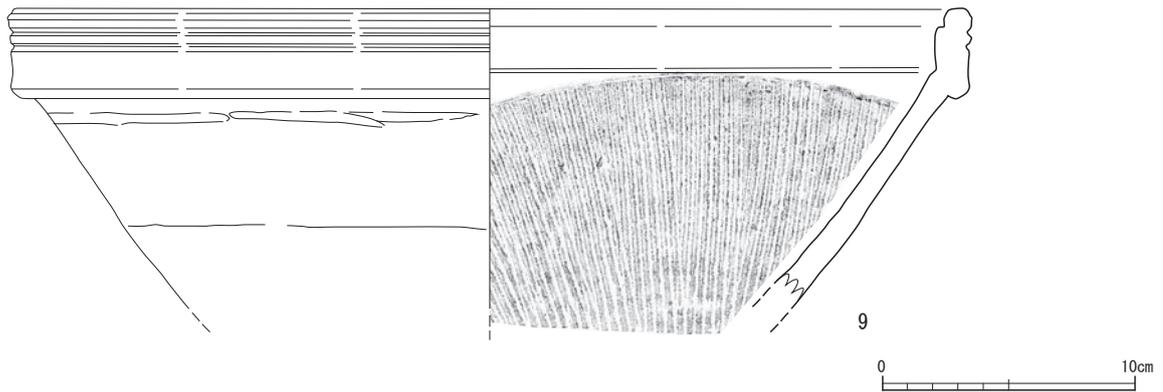
12は土師器の体部である。内・外面はハケメにより器面調整が施されている。

B区SM1 (第19～21図13～36、図版13～15)

13～19は磁器の椀である。13は肥前系の広東椀で、内外面に手描染付が施されている。18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。14は肥前系の端反椀で、内外面に手描色絵が施されている。18世紀末から19世紀のものと考えられる。15は肥前系とみられる端反椀である。内外面に手描染付が施されている。19世紀前半から中頃のものと考えられる。16は肥前系の端反椀で、内外面に手描染付が施されている。19世紀代のものと考えられる。17は肥前系の端反椀で、内外面に手描染付が施されている。19世紀前半のものと考えられる。18は肥前系の椀で、内外面に手描染付が施されている。見込には蛇の目釉剥ぎの跡がみられる。18世紀代のものと考えられる。19は瀬戸美濃



第17图 出土遺物実測図1 (1:3)



第18図 出土遺物実測図2 (1:3)

系の筒丸椀で、外面を線描した後、染付が施されている。19世紀代のものと考えられる。

20は陶器の椀である。高台を除いて鉄釉が施されており、黒褐色を呈している。

21・22は白磁である。21は肥前系の端反小皿で、見込に蛇の目釉剥ぎの跡がみられる。明治期のものと考えられる。22は瀬戸美濃系の端反皿で、見込に木型で5種類の型が浅く打ち込まれている。幕末から明治期のものと考えられる。

23・24は肥前系の磁器である。23は皿で、外面に手描染付が施されている。24は鉢で、口縁部は六弁の輪花で仕上げられており、内外面に手描染付が施されている。19世紀代のものと考えられる。

25～29は陶器である。25は大型の甕か壺の底部で、外面以外は鉄釉が施されている。内底面には2～3箇所が目跡がみられる。19世紀代のものと考えられる。26は備前系の壺蓋である。27・28は土瓶蓋、29は土瓶である。27の摘み部分には渦巻きの文様が、外面にはトビガンナで施文の後に鉄釉が施されている。28・29は白土のイッチンカケで絵付された後に灰釉が施されている。29は19世紀代のものと考えられる。

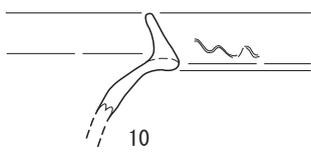
30は土師質土器の把手付土瓶である。把手と体部外面上方には型押文様が施され、外面にはススが付着している。

31は陶器の行平鍋である。外面にはトビガンナが施されている。注口と把手に光沢のない泥漿釉薬が施され、外面にはススが付着している。19世紀代のものと考えられる。

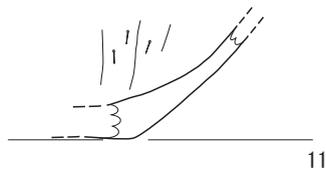
32・33は赤瓦の棧瓦である。32には上面に重ね焼きの痕跡がある。

34・35は砥石である。34は円礫を利用しており、5面使用痕が見られる。35はいわゆる吉川砥石⁽¹⁾で、4面使用痕が見られる。

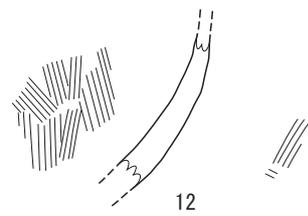
36は鉄滓である。一部が欠損しているが直径12cm前後、最大厚4.6cm、重量583.4gを測る。色調は褐色である。上面はやや窪み、鉄滓が気泡を含んで固化しているため凹凸が激しい。わずかに木炭小片が含まれている。底面は高台が欠失した椀のように丸く湾曲しており、砂礫が付着している。底径は9cm前後と推定できる。形状から炉底滓とみられるが、時期は不明である。同様に丸く湾曲した鉄滓小片があと2個体存在する。



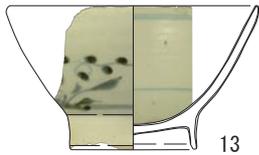
10



11



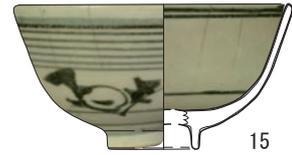
12



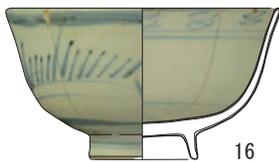
13



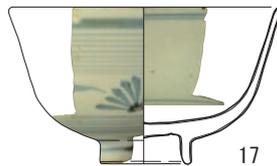
14



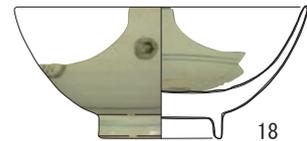
15



16



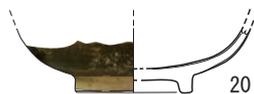
17



18



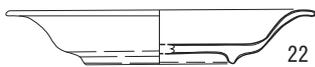
19



20



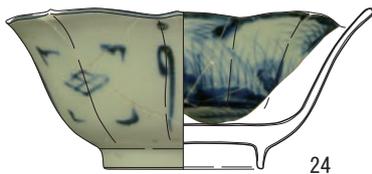
21



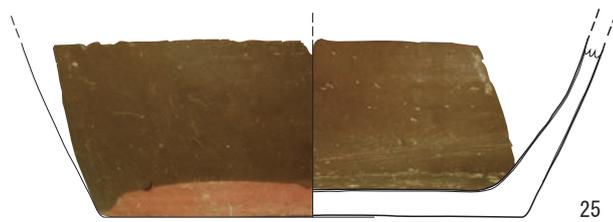
22



23



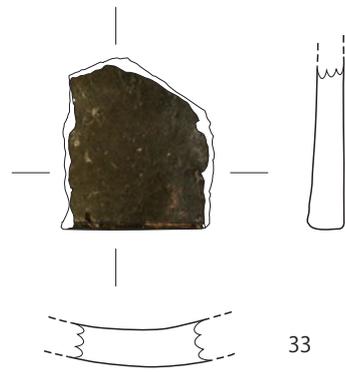
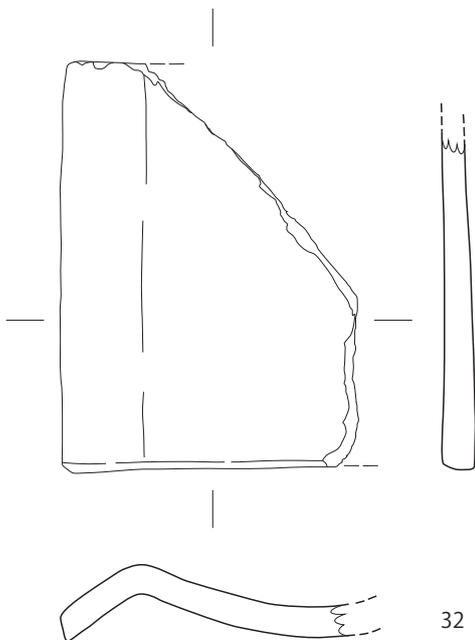
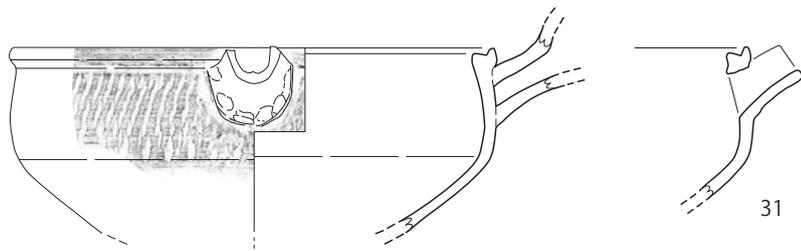
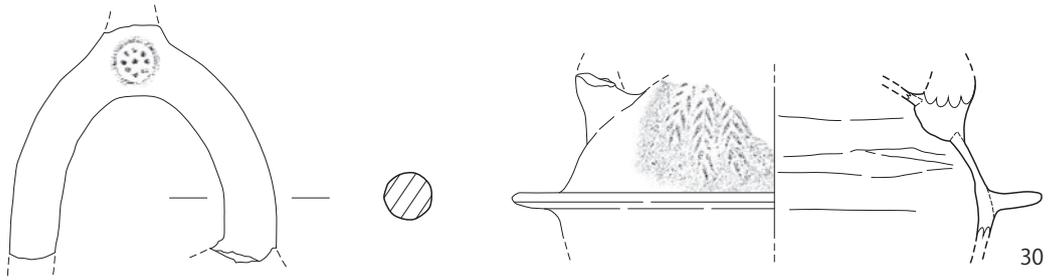
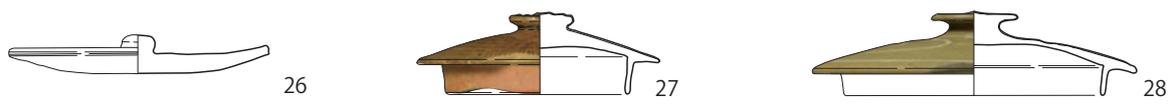
24



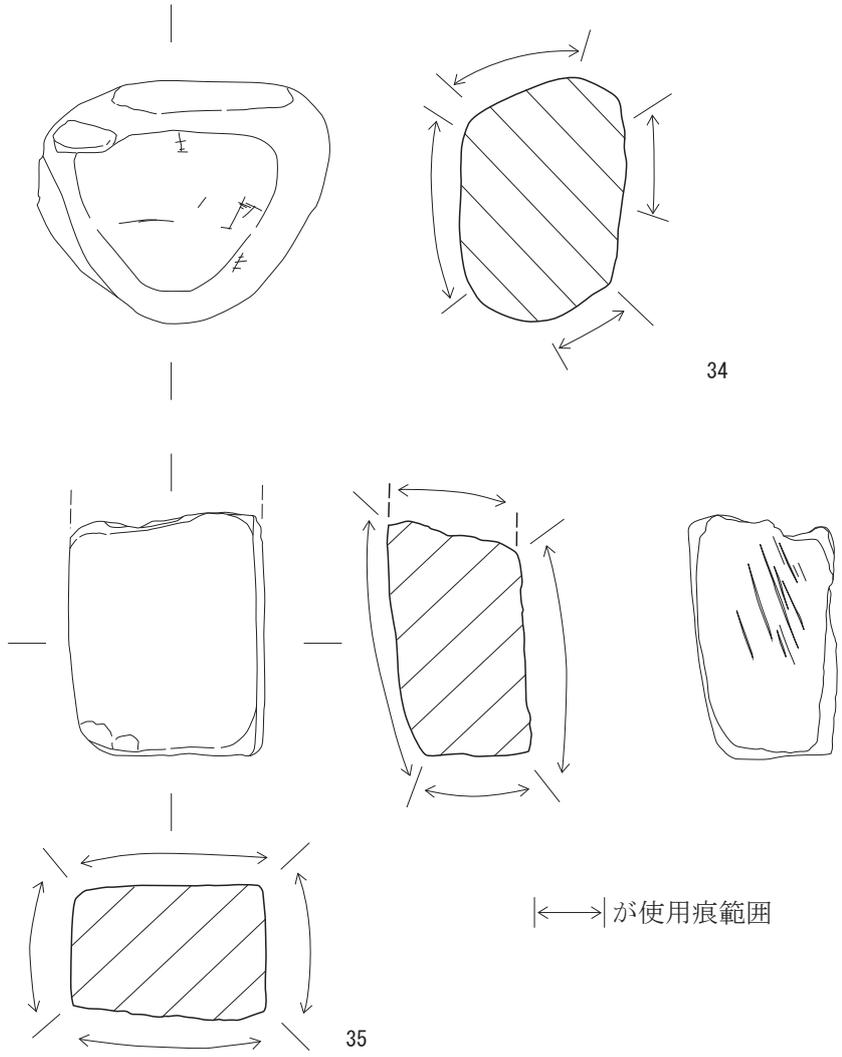
25



第19図 出土遺物実測図3 (1:3)



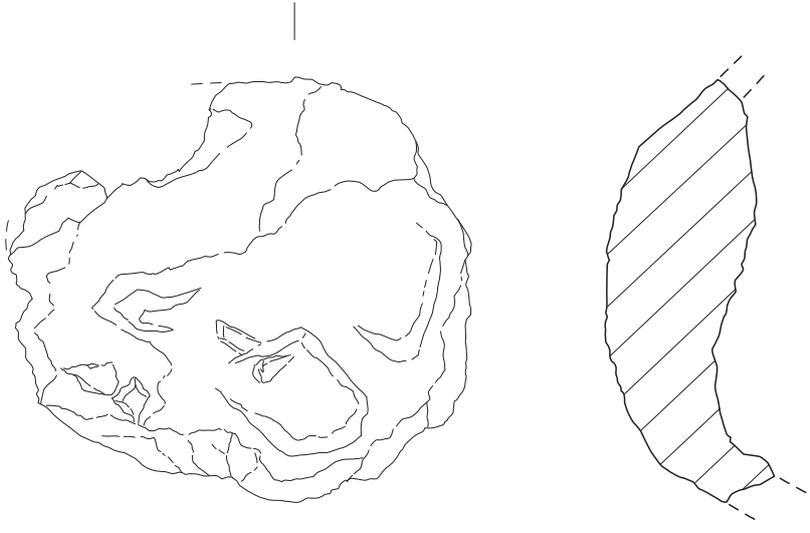
第20図 出土遺物実測図4 (26~31は1:3、32・33が1:4)



34

35

が使用痕範囲



36



第21図 出土遺物実測図5 (1:2)



第22図 出土遺物実測図6 (1:3)

古墓群 2 (第22図37、巻頭図版・図版15)

37は備前焼の壺である。粘土紐を積み上げて製作されたもので、ハケメおよびナデ、指頭によって器面調整されている。肩部には9条1単位のクシメが施されている。頸部から上を打ち欠いて、骨蔵器として転用されたと考えられる。底部は一部欠損している。出土状況については、Vまとめに記載している。

註

(1) 浜井士郎「吉川砥石」『東広島県の歴史事典』東広島郷土史研究会編 1997年

表1 遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) ()は復元値	胎土	焼成	色調	調整
1	A区 SK2 1層	弥生土器	甕	口径:17.2 器高:(27.6) 底径:4.5	良	普通	外面: 橙色 内面: にぶい黄褐色	外面: ナデ 内面: ヘラケズリ後ナデ
2	A区 SK2 1層	弥生土器	甕	口径:- 器高: 残存9.1 底径:-	良	普通	外面: 明赤褐色 内面: 橙色	外面: ナデか 内面: ナデか
3	A区 SK2 1層	弥生土器	甕	口径:- 器高: 残存12.3 底径:-	良	普通	外面: 橙色 内面: 橙色	外面: ナデ 内面: ナデ
4	A区 SK2 1層	弥生土器	甕か壺か	口径:- 器高: 残存15.7 底径:-	良	普通	外面: 橙色 内面: 橙色	外面: ナデ、ハケメ 内面: ナデか
5	A区 SK2 1層	弥生土器	甕	口径:(15.0) 器高: 残存9.5 底径:-	良	普通	外面: 浅黄褐色 内面: 浅黄褐色	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面: 口縁部ヨコナデ後ナデか
6	A区 調査区 褐色堆積土	陶器	椀	口径:(12.0) 器高: 4.8 底径:(6.0)	良	堅緻	外面: 灰黄褐色 内面: 灰黄褐色	外面: 鉄軸、体部沈線2条 内面: 鉄軸
7	A区 2T 下層(試掘トレンチ)	土師質土器	把手付鍋	口径:- 器高: 残存5.5 底径:-	良	堅緻	外面: 褐灰色 内面: にぶい褐色	外面: ナデ、指頭圧痕 内面: ナデ
8	A区 2T (試掘トレンチ)	土師質土器	鍋	口径:- 器高: 残存4.6 底径:-	良	堅緻	外面: 黒色 内面: にぶい黄褐色	外面: ナデ、指頭圧痕 内面: ナデ
9	A区 SK6 直下整地土	陶器	播鉢	口径:(38.0) 器高: 残存11.9 底径:-	良	堅緻	外面: 明赤褐色 内面: 明赤褐色	外面: ナデ、ケズリ、口縁部沈線2条 内面: ナデ、クシメ8条1単位、口縁部沈線1条
10	B区 調査区南東側 黄褐色堆積土	弥生土器	壺	口径:- 器高: 残存4.3 底径:-	良	堅緻	外面: 橙色 内面: 橙色	外面: ヨコナデか、波状文 内面: ヨコナデ
11	B区 調査区 黄褐色堆積土	弥生土器	底部	口径:- 器高: 残存4.5 底径:-	良	普通	外面: 橙色 内面: 橙色	外面: ナデ 内面: ヘラケズリ
12	B区 SR2 3層	土師器	体部	口径:- 器高:- 底径:-	不良	普通	外面: 橙色 内面: にぶい黄褐色	外面: ハケメ 内面: ハケメ
13	B区 SM1 No.13 (盛土検出面)	磁器	広東椀	口径:(10.0) 器高: 5.7 底径:(5.0)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(草花) 内面: 透明軸、手描染付(團線・不明)
14	B区 SM1 4層 上位	磁器	端反椀	口径:(9.2) 器高: 4.7 底径:(3.2)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描色絵(團線・草花) 内面: 透明軸、手描色絵(團線)
15	B区 SM1 4層 上位	磁器	端反椀	口径:(11.0) 器高: 5.7 底径:(3.6)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(多重團線・草花) 内面: 透明軸、手描染付(團線)
16	B区 SM1 1層	磁器	端反椀	口径:(10.8) 器高: 6.0 底径:(4.3)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(團線・草花) 内面: 透明軸、手描染付(團線・不明)
17	B区 SM1 No.17 (盛土検出面)	磁器	端反椀	口径:(10.7) 器高: 6.2 底径: 3.6	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(多重團線・草花) 内面: 透明軸、手描染付(團線)
18	B区 SM1 4層 上位	磁器	椀	口径:(11.6) 器高: 5.2 底径: 4.9	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(團線・丸紋) 内面: 透明軸、手描染付(團線・コンニャク判五弁花)
19	B区 SM1 4層 上位	磁器	筒丸椀	口径:(7.2) 器高: 5.4 底径:(4.2)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、線描後染付(草花と舟) 内面: 透明軸
20	B区 SM1 4層 上位	陶器	椀	口径:- 器高: 残存2.5 底径:(4.6)	良	堅緻	外面: 濃黄褐色 内面: 濃黄褐色	外面: 鉄軸 内面: 鉄軸
21	B区 SM1 4層 上位	白磁	端反小皿	口径:(9.3) 器高: 2.5 底径: 3.8	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸 内面: 透明軸
22	B区 SM1 4層 上位	白磁	端反皿	口径:12.3 器高: 2.1 底径: 6.0	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸 内面: 透明軸、5種類の木型の打ち込み
23	B区 SM1 4層 上位	磁器	皿	口径:(21.4) 器高: 2.1 底径:(12.6)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(椀間・橋・山水) 内面: 透明軸
24	B区 SM1 1層	磁器	六弁輪花鉢	口径:(14.9) 器高: 6.4 底径:(6.3)	良	堅緻	外面: 灰白色 内面: 灰白色	外面: 透明軸、手描染付(草) 内面: 透明軸、手描染付(方勝)
25	B区 SM1 盛土検出面	陶器	大型甕か壺の底部	口径:- 器高: 7.2 底径:(16.8)	良	堅緻	外面: にぶい赤褐色 内面: 暗赤褐色	外面: 鉄軸 内面: 鉄軸、目跡
26	B区 SM1 No.26 (盛土検出面)	陶器	壺蓋	口径:10.3 器高: 1.5 摺み径: 1.3	良	堅緻	外面: にぶい赤褐色 内面: 橙色	外面: ロクロナデ 内面: 回転ケズリ後ロクロナデ、回転糸切り痕
27	B区 SM1 4層 上位	陶器	土瓶蓋	受部径:(7.4) 器高: 3.3 最大部径(9.6)	良	堅緻	外面: 黄褐色 内面: 浅黄褐色	外面: 鉄軸、トビガンナ(回転施文) 内面: ロクロナデ
28	B区 SM1 4層 上位	陶器	土瓶蓋	受部径:(10.3) 器高: 3.3 最大部径(12.8)	良	堅緻	外面: 灰黄色 内面: 淡黄色	外面: 灰軸、イッチンカケ(白土)で絵付 内面: ロクロナデ
29	B区 SM1 No.29 (盛土検出面)	陶器	土瓶	口径:(10.0) 器高: 残存5.0 底径:-	良	堅緻	外面: 灰黄色 内面: にぶい黄色	外面: 灰軸、イッチンカケ(白土)で絵付 内面: 灰軸
30	B区 SM1 4層 上位	土師質土器	把手付土瓶	最大径:(20.8) 器高: 残存6.0 底径:-	不良	堅緻	外面: 黒色 内面: 灰白色	外面: ナデ、型押文様 内面: ナデ
31	B区 SM1 No.31 4層 上位	陶器	行平鍋	口径:(19.2) 器高: 残存7.3 底径:-	良	堅緻	外面: 橙色 内面: 橙色	外面: ロクロナデ、トビガンナ(回転施文) 内面: ロクロナデ
32	B区 SM1 4層 上位	赤瓦	棧瓦	全長:21.7 残存幅:15.6 厚:1.7	良	堅緻	外面: 灰褐色 内面: にぶい橙色	外面: 極暗褐色釉、ナデ 内面: ナデ
33	B区 SM1 4層 下位	赤瓦	棧瓦	残存長:9.1 残存幅:7.8 厚:2.0	良	堅緻	外面: 褐灰色 内面: 浅黄褐色	外面: 黒褐色釉、ナデ 内面: ナデ
34	B区 SM1 4層 上位	石製品	砥石	最大長:7.5 最大幅:6.5 厚:4.4 重量:276.95g	-	-	浅黄色	5面使用
35	B区 SM1 No.35 (盛土検出面)	石製品	砥石	残存長:6.4 残存幅:5.2 厚:3.6 重量:217.02g	-	-	灰白色で赤褐色の鉱物が筋状に入っている	4面使用
36	B区 SM1 4層 上位	鉄滓	-	長辺:12.2 短辺:11.2 最大厚:4.6 重量:583.4g	-	-	褐色	
37	古墓群2	備前焼	壺	口径:- 器高: 残存27.5 底径:14.6	良	堅緻	外面: 灰黄褐色 内面: 灰色	外面: ハケメ後に胴部指頭圧痕とナデ、クシメ9条1単位 内面: ハケメ、ヨコナデ

V ま と め

以下では、前述までの発掘調査の成果から、現時点で明らかとなった知見を整理してまとめとしたい。

1. 土坑について

SK2から出土した弥生土器は1の甕は口縁部が「く」字状に強く外反し、体部は球形で器壁は薄く、底部径は小さく平坦である。2・3も類似する口縁部を持つことから同様の器形であったことが考えられる。4は底部がほぼ丸底になる可能性がある。これらの特徴は安芸地方の弥生土器様式のV-5様式⁽¹⁾以降にみられるもので、弥生時代終末期から古墳時代初期に位置づけられよう。また5の二重口縁甕については当地域にはみられない器形と浅黄橙色の胎土で同時期の山陰系土器とみられる。土坑の性格は貯蔵穴の可能性はある。

SK3は近現代の染付磁器片が出土したSD1に切られており、SK7・8からは赤瓦や近世陶磁器の小片が出土しており近世以降であるが、いずれも性格は不明である。その他の土坑については、時期・性格ともに不明であるが、SK4～6は連続して営まれていることから当地域で近現代以降“こが壺”⁽²⁾あるいは“こえ壺”と呼称されている営農施設の可能性はある。第Ⅱ章でも述べたようにA区の所在する田は“新田”と呼称されていたことはこの推測を補強するものといえよう。

2. 溝について

SD1からは近現代の染付磁器片が出土しているが、性格は不明である。その他の溝については時期・性格ともに不明であるが、SD4以外はいずれもほぼ東西方向に構築されており、特にSD5・6は約7.5m間隔をおいて並行して営まれていることから、何らかの区画溝であった可能性がある。

3. 道について

SF1はA区中央に広がる整地土平坦面の直下から検出されている。この部分の整地土からは小片であるが、江戸時代初期頃の口縁部を肥厚させ、端部をつまみ出した土師質土器鍋⁽³⁾や染付磁器片が出土しており、平坦面の造成時期の下限を示している。そしてその下位に位置する道の埋土上層から出土した土師質土器皿片や土鍋片には近世以降に位置付けられるものは出土していないことから、道の造成時期は中世末以前と考えられる。

4. 塚について

SM1の基底を形成する褐色土下位から出土した赤瓦(33)の釉薬は、赤というよりは黒褐色に近く、釉薬の厚みは薄くムラがあるものである。これは天保15(1844)年銘を持つ西条町下三永の瓦製祠⁽⁴⁾の釉薬に近似しており、塚の構築時期は近世末と考えられる。

その性格は、調査区外に墓坑などが存在し墳墓である可能性もあるが、塚が報恩寺古墓群や“報恩寺田”あるいは“堂ヶマチ”へ通じる里道の峠部分に位置していることから、峠の信仰に関する構築物と考えられる。塚検出面からは小片ではあるが小仏花器が出土していることも、この推測を補強するものといえよう。遺物には土瓶、行平鍋などの炊膳具も含まれているが、磁器椀や皿などは塚への供献品と捉えることもできる。同様の峠信仰の構築物には西条町下見の黄幡4号古墓があげられ、同古墓は中世に構築された積石塚であるが、SM1と同様の立地と規模であった⁽⁵⁾。

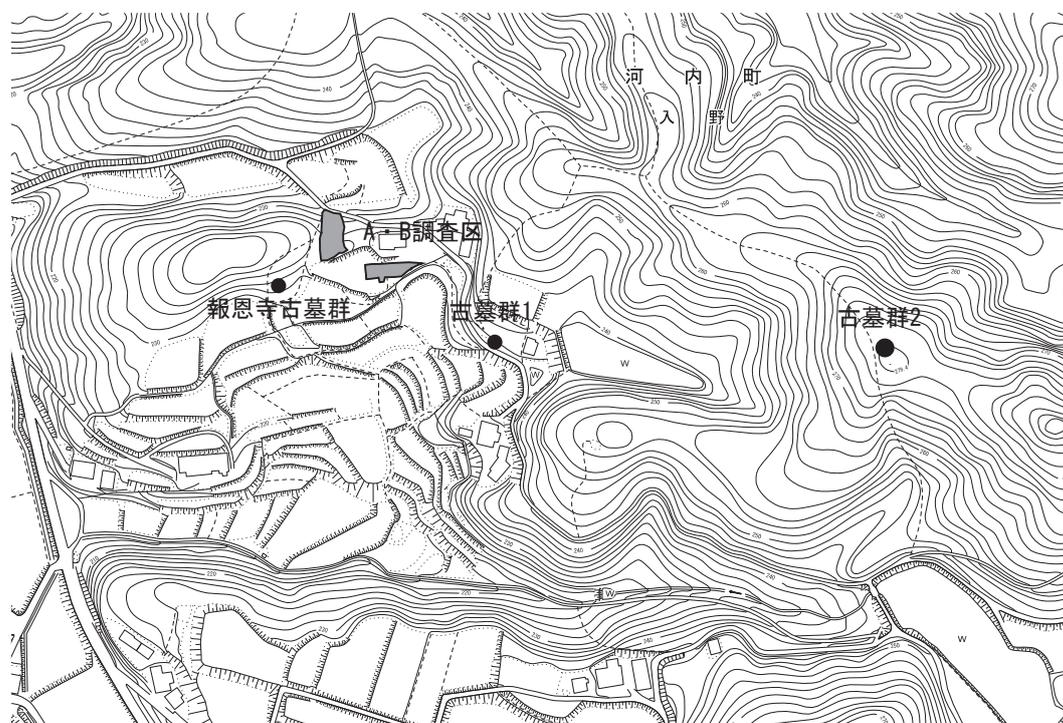
5. 古墓群2について

A区の東側約300mの丘陵頂部（279.4m）には直径3～4m、高さ約0.5mの石組の塚状基壇の上に3基ほどの五輪塔の残欠が見られる古墓群が存在し、高さ約1mの自然石の立石が塚に密接した状態で2基立てられている。土地所有者によれば約50年前に塚が盗掘を受けた際、立石のうちの1基が掘り返されて倒され、その前面に備前焼壺(37)が遺棄された状態で出土していたため採取・保管したとのことである⁽⁶⁾。

本来は茶壺として使用される形状と法量の壺であるが、口縁部が意識的に打ち欠かれており、骨蔵器に転用されたとみられる。

時期は、形態から備前IV期前半、14世紀末から15世紀前半に位置付けられる⁽⁷⁾。

古墓群の立地は報恩寺本堂の伝承地から約400m離れた山上であるが、本堂をはじめとする寺中心部を見下ろすことが出来る場所であり、報恩寺の寺域東端に営まれた関連人物の墳墓と考えたい。



第23図 古墓群2位置図 (1:5,000)

6. 結 語

最後に、遺跡名称になっている報恩寺と本遺跡から検出された遺構との関連について述べたい。

報恩寺の初見史料は、江戸後期に成立した『芸藩通志』の原資料である「高屋稲木村国郡志下調書出帳」に収められている長福寺文書の中の、応永三十二（1425）年八月十八日付の慶仲周賀契状^⑧である。本史料は、平賀氏に関連するとみられる京都相国寺の住持、慶仲周賀の所領関係文書で、このなかで、彼は高屋保稲木の長福寺とともに、入野郷大屋村の報恩寺は自己相伝の寺である旨を記している。したがって報恩寺は15世紀初頭には成立していたことが確実である。

そして、第Ⅱ章でも紹介した報恩寺古墓群（図版11）には、在銘の宝篋印塔が存在しており、中央の一基の基部南面には“前武庫春巖香公禪定門”、“天正五丁丑二月吉日”“敬白”と刻字されている。法名の人物について『芸藩通志』は平賀廣相と推測しているが^⑨、その是非は別として、天正五（1577）年時点では、報恩寺が営まれていたことはほぼ確実であり、おそらく16世紀末頃までは存続していたとみられる。

今回の発掘調査で検出された道（SF1）は中世末以前に構築されていることから、報恩寺の存続時期と重複する唯一の遺構である。この道は現在もA区南側を東西に縦走している里道（第2・3図）につながっていると考えられる。その里道を西側に下ると、本堂が所在していたとの伝承がある“報恩寺田”の南側に出ることから、本堂周辺に点在している墳墓や、存在していたことを裏付ける資料は見られないが、僧坊といった寺の関連施設への連絡路とみるのが可能ではないだろうか。

註・参考文献

- (1) 妹尾周三「安芸地方」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』正岡睦夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
- (2) 中山 学「IVまとめ」『西東子遺跡発掘調査報告書—西東子宅地造成開発事業に伴う発掘調査—』東広島市教育委員会 2011年
上記報告書ではこが壺を「その目的は生活残滓あるいは糞尿を貯蔵・発酵させて有機肥料を生産した屋外営農施設である。」と定義しているが、正しくは農業用水を貯水することを目的としたものを当地域では“こが壺”といい、報告書で述べた有機肥料を生産する営農施設は“こえ壺”と呼称するので、訂正しておきたい。
- (3) 吉野健志「IV遺構と遺物」『下上戸遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 1996年
上記報告書に報告されているSB11から出土した土師質土器鍋52～54がそれに該当する。
- (4) 塚本順子・妹尾周三「東広島市西条町下三永発見の瓦製祠について」『文化財論究』第2集財団法人東広島市教育文化振興事業団 2002年
- (5) 青山 透・吉田由弥『黄幡4号古墓発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 2009年
- (6) 古墓群2の土地所有者で備前焼壺を保管している友安義彦氏から、2014年4月17日に聞き取りを行い、同年12月8日に現地石組塚状基壇の存在を確認した。
- (7) 伊藤 晃「4 備前 9 中世陶器 III 土器・陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年
- (8) 飯田米秋「高屋の平賀氏」『賀茂郡史—中世武士編—』東広島ジャーナル 1984年
- (9) 平賀氏系譜によると平賀廣相は永禄十（1567）年に没し、その子息元相は正保二（1645）年に没していることから宝篋印塔に刻字されている年号とはいずれも合致しない。なお、宝篋印塔は、塔身部分が欠失しているが、形状及び材質から周防・長門地方で製作されたものと推測される。安芸国では廿日市以西に類似があるが、東広島市内では唯一の遺品であり、一部欠損しているとはいえ、周防・長門地方との関連を窺わせる貴重な遺品といえる。
東京大学史料編纂所 編「二四八 平賀氏系譜」『大日本古文書 家分け第十四』東京大学出版会 1937年

図 版



報恩寺遺跡空中写真近景（南東から）



a. 調査前遠景 (南から)

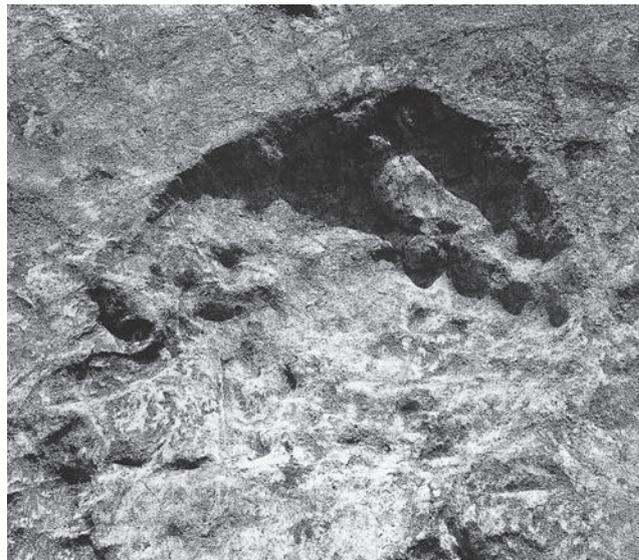


b. 調査前近景 (南東から)

図版 2



a. A区SK1土層断面（南から）



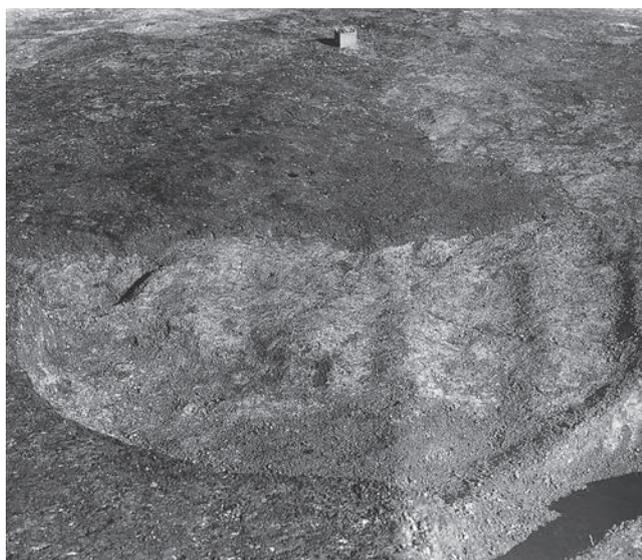
b. A区SK1完掘状況（北から）



c. A区SK2土層断面（東から）



d. A区SK2遺物出土状況（北東から）



e. A区SK3土層断面（南から）



f. A区SK3完掘状況（北東から）



a. A区SK4土層断面 (南から)



b. A区SK5土層断面 (南から)



c. A区SK6土層断面 (南から)



d. A区SK4・5・6完掘状況 (北から)



e. A区SK7土層断面 (南から)



f. A区SK7完掘状況 (北から)

図版 4



a. A区SK8土層断面（東から）



b. A区SK8完掘状況（東から）



c. A区SD1・2完掘状況（南西から）



d. A区SD1土層断面（北東から）



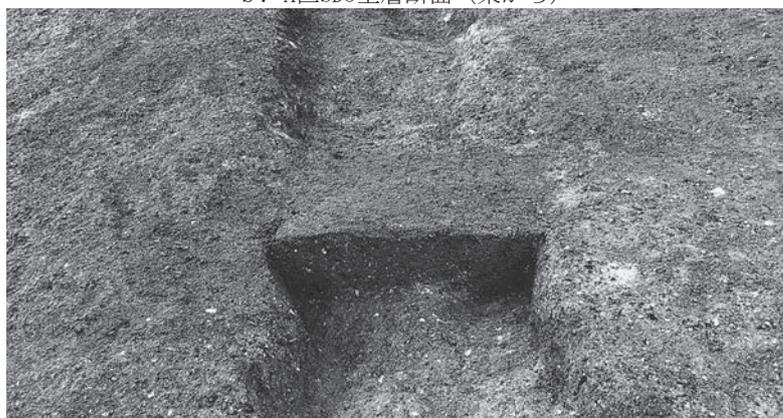
e. A区SD3完掘状況（北東から）



a. A区SD4完掘状況（北から）



b. A区SD5土層断面（東から）



c. A区SD6土層断面（東から）



d. A区SD5・7・8完掘状況（西から）



e. A区SD6完掘状況（西から）

図版 6



a. A区SF1土層断面（北から）



b. A区SF1完掘状況（北から）



a. A区SV1土層断面 (南から)



b. A区SV1検出状況 (西から)



c. A区T1土層断面 (西から)



d. A区完掘全景 (西から)

図版 8



a. B区SB1土層断面（北から）



b. B区SB1完掘状況（北西から）



a. B区SB2土層断面 (南西から)



b. B区SB2完掘状況 (北西から)



a. B区SM1検出状況（北東から）



b. B区SM1遺物群1出土状況（東北から）



c. B区SM1土層断面（南東から）



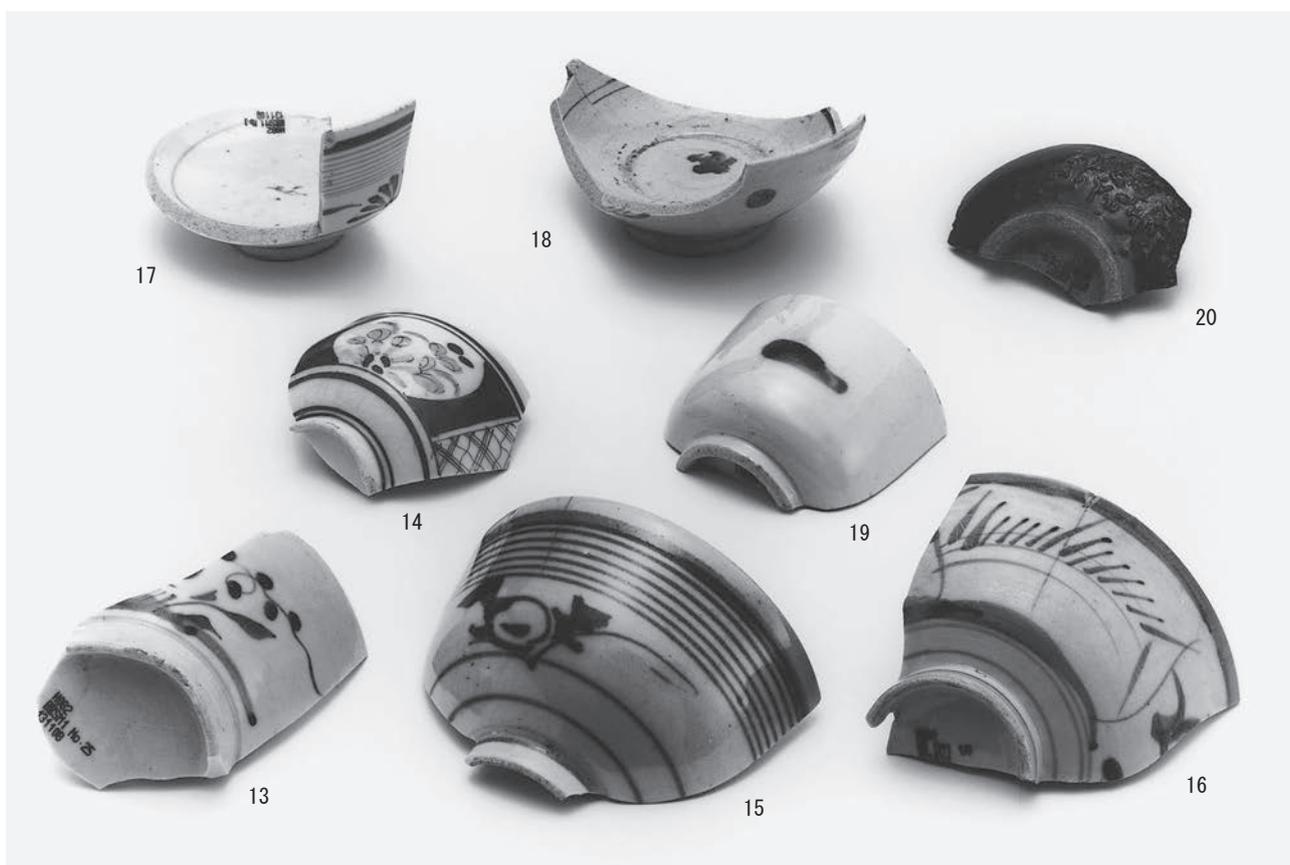
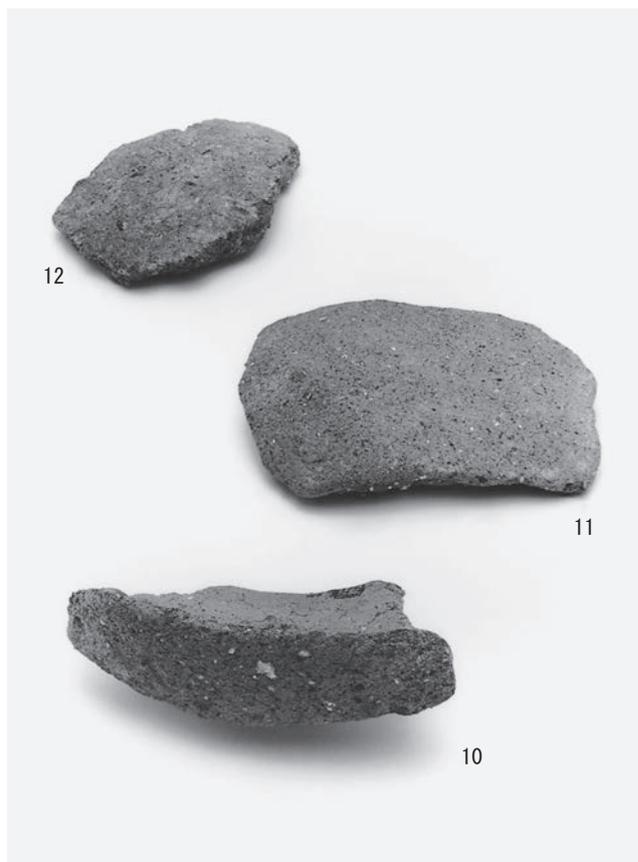
a. B区完掘全景（北から）



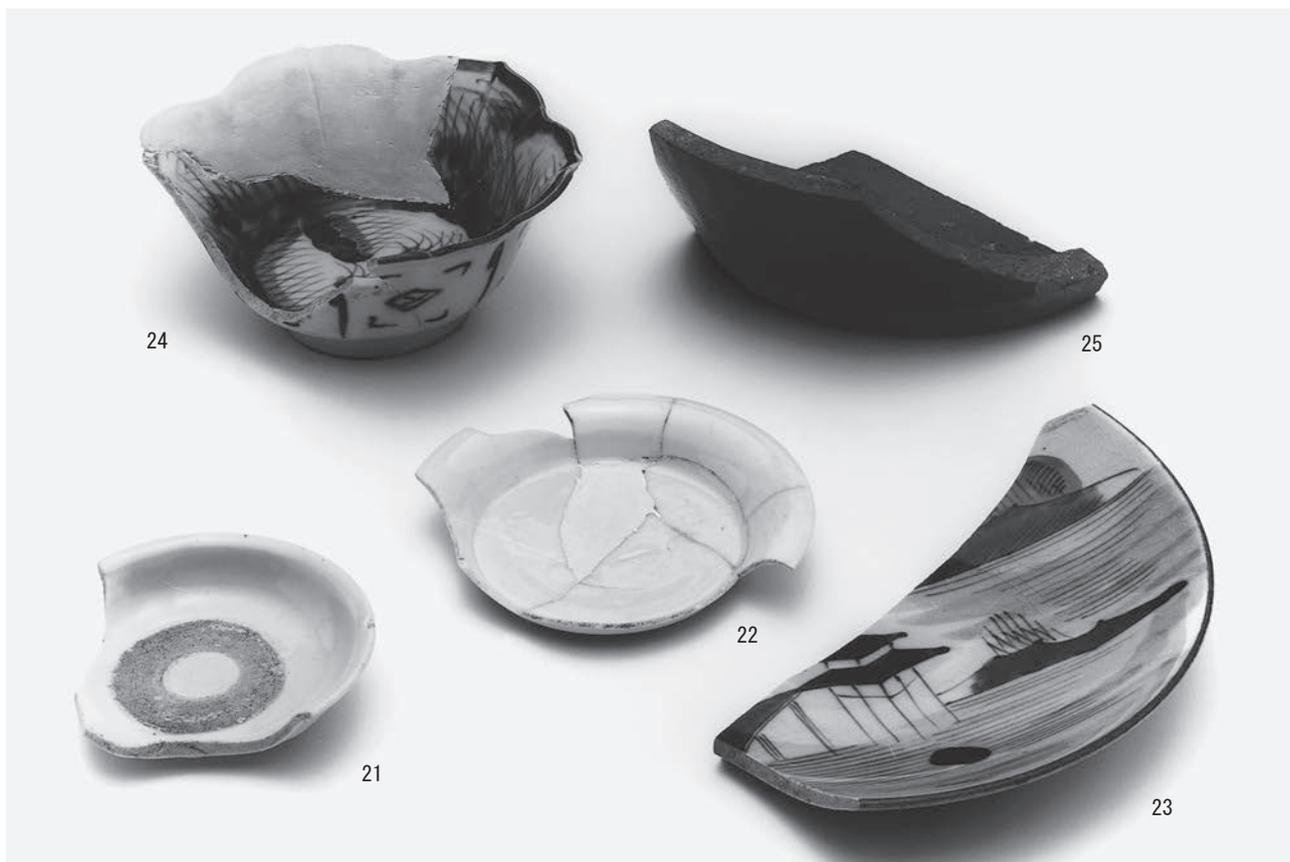
b. 報恩寺古墓群近景（右から3番目が天正五年銘宝篋印塔）



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうおんじいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	報恩寺遺跡発掘調査報告書							
副書名	市道整備事業大矢循環線道路改良工事に係る発掘調査							
巻次								
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第49集							
編著者名	中山 学、吉田由弥							
編集機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番地7 TEL 082-420-7890							
発行機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうおんじいせき 報恩寺遺跡	ひがしひろしまし 東広島市 こうちちやうにゅうの 河内町入野	34212	6174	34° 25' 20"	132° 52' 16"	20131015 ~ 20131227	660m ²	市道整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
報恩寺遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世 近世		土坑 溝 石列 道 段状遺構 塚		8基 8条 1条 1条 2基 1基	弥生土器 土師器 土師質土器 陶磁器 赤瓦 石製品(砥石) 鉄滓	
要約	報恩寺遺跡は中世に創建された報恩寺の東側丘陵上に位置する。市道整備事業に伴って発掘調査を実施した。その結果、弥生時代から近世に至る遺構と遺物を検出したが、なかでも報恩寺と同時期の道や近世の峠信仰に係る塚は注目される。							

東広島市教育委員会文化財調査報告書 第49集

報恩寺遺跡発掘調査報告書

発行日 2015（平成27）年3月20日

編集・発行 東広島市教育委員会
〒739-8601広島県東広島市西条栄町8番29号

印刷 山脇印刷株式会社
〒725-0003広島県竹原市新庄町29